
コナンと黒の組織の決戦

たくみ226

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コナンと黒の組織の決戦

【Nコード】

N4409B

【作者名】

たくみ226

【あらすじ】

『江戸川コナン』宛に、毛利探偵事務所に送られた手紙から起こる『組織』の唐突な迷走。コナンの身の回りで起こるさまざまな『悪夢』。『探偵』はもちろんのこと、『日・米の国家問題』にまで発展していく『混乱の交響曲^{シンフォニー}』になる。作者はPCでしか作業しないので、この作品はPC環境を推奨します。携帯環境でどうなるかはわかりません。

第1話（0日目） プロローグ 蘭が拉致されるまで

0日目・・・ 18時30分

米花市米花町に住んでいる毛利蘭。彼女は、この後悲惨な出来事に直面するのだ。

「道場の鍵を閉めたことだし、今晚のご飯の材料買って帰ろつと。」

蘭は帝丹高校空手部の生徒の中では一番最後に帰宅したので、一緒に帰る人がいなかった。そして、そのことが彼女を不幸に陥れることとなったのだ。

蘭は商店街で今日の晩御飯のにんじん、牛肉、たまねぎ、シチューのルー…を購入した。

彼女は運がよかったことに、たまたま実施していた商店街の福引きで5万円の商品券が当たった。

しかし、これで運を使い果たしてしまったのだろうか。帰りに米花公園の前を歩いたそのとき

蘭「誰？」

蘭は不審な人気を察知した。しかし、後ろを振り返っても誰もいない。一瞬、お化けか何かと思い、警戒したが何も見えないのでそのまま前に進んだ。そのとき、いきなり男が蘭を襲おうとした。

蘭は、足音が後方から近づいてくるのがわかり、後ろを振り向くと棒のようなものを持った男が見えた。一瞬でそれが暴漢と判断し、一人を蹴飛ばした。周囲にはかの人がいなか確認しようとしたとき、もう一人近づいてくるのがわかった。蘭は、襲いかかってきた

男を見事に背負い投げした。その男だけに集中していた蘭は、もう一人の男が背後から忍び寄ってくるのが分からなかった。

「ウツ……バタツ……」

3人目の男はクロロホルムを染み込ませたハンカチで蘭の鼻と口を押さえ蘭にその匂いを否応に嗅がせた。そのため、蘭は2人目に得意の空手を使う間もなく倒れこみ、車に運び込まれた。男は「成功です」と携帯電話でどこかに掛けていった。

2人目の男は背負い投げされており、体中から痛みを感じていた。男が立ち上がりとしたところ、現場後方100メートルに停車していた車から、外国人女性が車から降り、接近してきた。

「今から着替えるから、その女を車内に入れて監視してなさい。彼女、空手の都大会の優勝者なんだから。あんたたち、彼女を甘く見るからこうなったんじゃない」

すると、襲撃した3人の男がその女に「ねえさん。それなら、その格好で偵察するんですね？」というと、女は表情に少し笑みを浮かべて「ジンの指示に」と言った。

「分かりやした。では、この女は倉庫にでも置いときます」

すると、女は男たちに怒鳴った。

「その女には何もしないこと！分かってると思うけど、何かしたら殺すわよ！」

この女は元々高飛車な女であることは組織で彼女に接触できる人間は分かっており、本来の容貌は美しいアメリカ人ではあるものの、性格は逆であることは有名だ。

しかし今のその女の容貌は、先ほど自分たちが眠らそうとして格闘していた女と同一人物だ。とはいえ、予想もしない拘束した女に対する扱い方にびっくりした。彼らは、普通このようにした人間を山中に埋めたり、ばらばらにして海に投棄したり、産業廃棄物とすることが仕事であったからだ。今回みたいな誘拐の仕事はめったにない。

男は、女を見て「わ、分かりやした」といえなかった。

男は、この毛利小五郎の娘に対して殺さないとは…絶対裏に何かあるが、詮索使用と動く絶対と殺されると思い、この疑問に関しては一先口を開かなかった。

男は、車のトランクに蘭を載せ、負傷者を後部座席に座らせた。

女は車から離れると、蘭の所持品をすべて持って歩いていった。まるで蘭のように。

男は車に乗り、どこかへ消えていった…。

第2話（1日目） プロローグ 招待状の前夜

一日目 19時00分 米花公園

女は、蘭が持っていた荷物を持ち、蘭の服装に公園のトイレで着替え、普通に歩いていった。

そして、毛利探偵事務所に侵入した（帰ってきた）。

19時20分 毛利探偵事務所

彼女がドアを開けると、元気良く少年の声が聞こえた。

コナン「お帰り、蘭姉ちゃん。」

ベルモットが変装した蘭（以後ニセ蘭）「ただいまあー。」「この子は・・・やっぱりこの子だったのね。かわいい子ねクールガイ・・・。私を疑いもせずに入れるんだから。」

蘭は帝丹高校の制服から着替えて居間に居ると、小五郎は何も疑わずに蘭に言った。

小五郎「今日の夕飯は何だ？もう、はらぺこだあー・・・。どうにかしてくれないか？」

すると、ニセ蘭は冷蔵庫を覗いて、本物を買ってきた食材と合わせてこの中で何ができる考えていた。

ニセ蘭「今から・・・シチューを作るわ。ちょっと待っててねえ。」
「それにしても、あの子は私が変装していることが分かっても追いつめられないでしょうね。どれにしても、この毛利小五郎なんて自分の本当の娘と区別できないのかしら？私のメイクがそれだけ傑作だということね・・・。でもこんな事をして・・・有希子なら何て言うかしら？」

そして、ニセ蘭がそう思っているとき、ニセ蘭に聞こえないように小五郎とコナンは2階に下りて会話をしていた。

小五郎「おい、コナン。なんか蘭って今日、気分がよさそうだなあ？」

コナンもそう思っていた。そして、首を縦に振って言った。

コナン「う、うん。何かおかしいねえ・・・（何かがいつもの蘭とは違うようだが・・・）」

20分後

ニセ蘭は料理を完成させたので、まだ2階にいる2人を大きな声で呼んだ。

ニセ蘭「コナンくん。お父さん。夕飯出来たから、3階に上が

って」

ニセ蘭は、探偵事務所にいた2人を、3階に上げさせた。

このとき、まだ2人は蘭のことを怪しんでいた。

小五郎「なあ、コナン。やっぱり、気のせいかな？」

コナンは適当に言った。

コナン「それでいいんじゃない？何か大きな事あったわけじゃないし、僕達の気のせいかもしれないね。」

翌朝・・・

この日から、コナンの関係者は、危険な戦いに招待される事となる。

AM5時・・・

まだコナンと小五郎は寝ていた。ニセ蘭はというと・・・

ニセ蘭「t r r r r・・・（電話の音）」

3回コール音がなってから、ニセ蘭の電話の相手は出た。

男「はい、姐さんですか。」

男は独特の声でニセ蘭にしゃべりかけた。そして、ニセ蘭は話しておきたい重要事項だけを言った。

ニセ蘭「これからこっちに例の手紙が届くから、貴方は、計画どうりにしてよ！」

男は電話している相手に見えないが、その電話している場所で頷いていた。

男「分かりやした。すでに姐さんの指示したガキ共は拉致して、昨日の女と同じところに置きやした。」

ニセ蘭は最も聞きたいことを聞いていた。

蘭「ねえ、ウオッカ。貴方、あの女の子殺してないわよねえ？」

ウオッカは『滅相も無い』ですと言わんばかりの声で、現在の状況をニセ蘭に話した。

ウオッカ「殺してませんよ。起きたら、ちゃんとしてメシを食わせますから・・・（何で拉致したやつにメシをやるんだ？）」

それを聞いてニセ蘭「よろしくね・・・」と言って電話を一方的に切った。

こうしてニセ蘭は、自分の弁当と朝食の下ごしらえをした。

AM 7時

ニセ蘭「コナンくん。お父さん。朝よ！早く起きて！！」

コナンと小五郎はこのニセ蘭の声で起こされた。

コナン・小五郎「う、うん・・・ファ・・・（アクビ）」

小五郎は目をバシバシさせながら「蘭。メシは？」と言った。

ニセ蘭は少し怒った様に言った。

ニセ蘭「テーブルに並んでるから、早く食べてよ！私は時間が無いんだから、そのことも気にしてよね！！」

コナン・小五郎「いったきまゝす！！」

コナンはいつもどおり、朝食の感想を言った。

コナン「蘭姉ちゃん。いつもご飯おいしいね。」

それに小五郎も少し頷きながら言った。

小五郎「やっぱり、蘭の料理はうまいな・・・」

朝食後

全員「ご馳走様」

3人がご飯と食べ終わると、郵便のバイクの音が聞こえてきた。

『ブブブブ・・・』

郵便局の人がバイクは毛利邸の前に止まり、手紙を1通だけ郵便受
けに投函した。

蘭「コナンくん。手紙が届いてるよう。」「どうとう来たのね・・・
私の頼みのシルバートレッド君・・・頼んだわ。」

こうして、この郵便局の人間から渡されたたった一通の手紙から、
数々の人間に危険が及ぶ組織崩壊の交響曲シンフォニーの始まりとなった・・・。

第2話（1日目） プロローグ 招待状の前夜（後書き）

こんばんは、たくみ226です。

『プロローグ2話連続かよ!？』こう言われる方が居られるかもしれません。

この話は『手紙』が届いてからを本編としては始めるので、まだプロローグですが、これでプロローグは終わりです。次回は『手紙』が届きます。そこから始まるコナンと黒の組織の決戦をお楽しみください。

第3話 第1章 組織崩壊への招待状

黒の組織との対決…一日目

米花町の毛利探偵事務所に、1通の手紙が届いたことに始まる・・。

その手紙は、真っ黒な封筒で、あて先にこの毛利探偵事務所がある住所と『江戸川コナン』という文字が白抜き文字で、パソコンで打ち出した書体で書かれていた。

蘭「コナンく〜ん。手紙が届いてるよ〜」

コナンは、子供の声で蘭に答えた。このとき、彼や彼女は微塵に思わなかっただろう。その手紙が彼自身、それに、数千・数万もの日本人やアメリカ人の人生を大きく変えてしまうことになることを・・。

コナンは、この毛利探偵事務所に自分宛に来る奇妙な手紙の送信者が気になったが、それでも蘭にはいつもと同じような声で返した。コナン「はぁ〜い。（ここに住んでること誰がオレに手紙を・・・父さん・母さんか？それとも他の・・・）」

蘭がコナンに「コナン君、これよこれ。」といって手紙を見せた。そしてコナンは蘭に質問した。

コナン「蘭姉ちゃん。この僕宛の手紙開けた？」

すると、蘭は「開けてないわよ。コナン君の手紙を勝手に見ちゃ駄目いけのは私だってそれくらい分かるわよ。」

そしてその後、蘭から信じられない言葉が発せられる事となった。

蘭は、続いて差出人の名前を読み上げた。

蘭「はい。コナン君。G・I・N・・・ローマ字で言うときんさんかな？」

コナンは少し疑問に思った。そんな名前の人間に会った事が無かったからだ。

コナン「僕に読ませて。」

しかし、蘭は首を横に振った。

蘭「無理よ、コナン君がこれを読もうなんて・・・。英語とか知らないんでしょ？」

すると、コナンは蘭に要望を言った。

コナンの「別の読み方で読んでみてよ。」という願いに、蘭は「分かった。他の読み方で読んでみるわ。」と言った。

蘭は、ローマ字でなければ英語？と思ったその瞬間・・・ふと、小五郎の席においてる”ブランドー”を見てからこう言った。

蘭「どう読めばいいのかしら・・・GIN・・・お酒の名前で言う
と『ジン』になるわね・・・」

このときコナンは、一瞬凍りつき、怒った口調で蘭に言った。

コナン「蘭姉ちゃん。誰からって?! もう一回言って!」

蘭は立って読んでいたためコナンにはその手紙の『GIN』と言う
差出人の名前が見えなかった。

蘭「GIN・・・洋酒の名前で言うと『ジン』かしら?」

蘭にしてみれば、『ジン』がどういう人間か分らないので、コナ
ンのその驚いた様な恐れていた様な口調をしたことが不思議の思っ
つつも、これくらいで驚くコナンを尻目に、普段通りの口調で言っ
た。

蘭「コナン君。そんなに驚いた口調をしなくてもいいじゃない。だ
から、”ジン”さんからだって。」

コナンはその『ジン』の呼び名に驚き、蘭に対して怒った口調で言
った。

コナン「ジンからだって! 読ませて!!」

その手紙を蘭の手から剥ぎ取ると、その中にはこう書かれていた。

親愛なる江戸川コナン様。いえ、APTⅩ4869で幼児化した

君の小学生の親友と言えるような子供を拉致した。もしも返してほしければ、お前が匿^{シエリー}つてる宮野志保と共に、米花港のTN倉庫に来い。

GIN

コナンがその手紙を読み終わるとすぐに、蘭は「コナンく～んな内容の手紙なの？」と質問した。

コナンは「いや、なんでもないよ……。」と答えた。

しかし、その瞬間、開けっ放しになっている事務所の窓から、一気に強風が吹いてきた。そして、その手紙はコナンの手を離れ……

蘭は、何気なくコナンが持っていた誘拐の犯行声明文を手に取り、見てしまった。

蘭「コナン君の手紙の内容って何だろう……。」

手紙を読んだ瞬間、蘭の体は完全に凍りつき、彼女の目を見ると泣きそうになっていた。コナンは、心の中で『来るべきものが来てしまったか……。』そう想っていた。

蘭「うそでしょ？ ウソだよねえ？ コナン君……」

コナンは心の中で『蘭に見られたんじゃない。このまましらをきりとうせるはずがないし、もう言うか……。しかし、今は灰原のことについては黙っておこう……。』と想っていた。

するとコナンは蘭に静かに事のあらましを話し始めた……。

コナン「蘭。ウソじゃないんだ。今まで隠し通していて悪い。蘭には信じられないかもしれないが、オレは……。俺の本当の正体は……
・正真正銘の工藤新一だ！！」

蘭はこのコナンの発言に驚いた。しかし、人間が小さくなるなんて常人には信じられるわけが無かった。

蘭「嘘でしょう……。まさか、高校生が小学生になれるわけが無いじゃないの？」

これにコナンは反論した。

コナン「いや、オレは工藤新一だ……。その証拠に……」

コナンは必死で蘭に自分が工藤新一だと思わせれるように、蘭と新一の二人だけで遭遇した出来事を全て話し始めた。そして、その話を聞くと、蘭はコナンを新一だと認めた。蘭と新一としか知らない

いことを全て知っており、蘭がその事件のことを質問しても全て答えられたからだ。

蘭は新一に、『核心』の『どうしてこんな小学生の姿に縮んでしまったの?』と質問と同時に、「どういうこと?ちゃんと説明して新一!」と言った。

すると、意外にもあっけなくコナンは、「実は・・・」と言ってジェットコースター殺人事件の後の黒の組織による取引のことについて、重い口を開けて話した。

蘭はその話を黙って聞いていたが、その話を聞いていくうちに、怒りよりも悲しみや恨みの感情が出てきて、最後には、感情を押し殺して蘭に語っている新一コナンよりも、ただ聞いていた蘭のほうが泣き出してしまった。

蘭は、泣きながら新一コナンに『なぜ今まで正体を隠していたのか?』その理由を問い詰めていった。

蘭「・・・そうだったの・・・。私、新一のことすごくすごく心配してたけど、意外にも私のこんなすぐそばで笑ってしゃべっていたのね!?私が新一のことを考えているとき・・・コナン君、いや、新一はどう思っていたの?」

コナンは、ここでも張り裂けそうで泣きたい思いをしていたが、すぐそばにいる蘭のことを思うと泣けなかった。そして、コナンも蘭も数分間無言の時間ときをすごした・・・。

数分後・・・

コナンがこの重苦しい空気の中でしゃべり始めた。

コナン「このことは、誰にも話すなよ!! もちろん、おっちゃんや目暮警部たちにもオレが話すまでは・・・」

蘭はそこに出てこなかった人間を挙げて彼らはどうなのか聞いてみた。

蘭「じゃあ、新一のお父さんとお母さんや、阿笠博士はどうなの？ 新一のお父さんとお母さんには当然伝えとかなないと作戦はできなかったでしょうし・・・」

コナンはそのことについて包み隠さず話した。

コナン「実は彼らにはとくに話してるんだ。阿笠博士にはあの事件の日、父さん母さんには、その後・・・」

蘭はその言葉を聴いて絶望を感じてしまった。それはそうだろう。

『工藤新一』の過去からの現代まで進行形でつかがりのある関係者では、蘭だけが正体を知らなかったのだから・・・

蘭はコナンに顔中に涙が付着して線を形成し、さらにその跡を今でも涙が通ってる状況で言った。

蘭「じゃあ・・・新一の周りの人の中には私だけが知らなかったの？」

コナン「・・・・・・・・」

蘭「どうなの？ 新一・・・」

コナン「・・・・・・・・」

コナンは幼児化してから『江戸川コナン』として偶像で過かりのすがたぎしてき

て、今までの『新一がいない状況』によって散々蘭を精神的に苦しめてきたことが分かっていたので、それが悔しく、そして、悲しかったのでそれから何も言えなかった。

そのまた数分後・・・

蘭は本題の誘拐の犯行声明文の事を聞いた。

蘭「新一。この手紙の内容は何？」

コナンは数秒考えた後に言った。

コナン「少年探偵団が、おそらく昨日から歩美ちゃんの友達とキャンプに言ってるときに俺の体を小さくした黒の組織の人間に拉致されて、今日、探偵事務所に、オレ宛に手紙がきたのだろう・・・。」

蘭は頼りになる人間を呼ぼうと考えていた。

蘭「とりあえず、競馬場で競馬を見に行ってるお父さんと、警察の人に協力してもいいでしょう。」

コナンは彼はあまり役に立たないことを分かっていたが、それをここで言ってしまうとまた面倒なことになり、彼らの救出が遅くなる可能性が考えられるため、それは言わなかった。

コナン「そうだな。2人で救出するよりそのほうがいいからな!!」

そうしてコナンと蘭は力になる人間を呼び集めた。

第4話 第1章 彼の正体・・・

ニセ蘭は父親である毛利小五郎に電話を掛けた。

ニセ蘭「私はお父さんに電話するわ。」

『T r r r・・・』

小五郎は、競馬のレースとレースの間でのんびり休憩していた。

小五郎「はい毛利小五郎。」

ニセ蘭は緊迫した様子で言った。

ニセ蘭「お父さん？」

蘭のただならぬ気配を察知した。

小五郎「どうした蘭？今競馬でもうすぐで今日一番の見所^{レース}なんだが何かあったのか？」

ニセ蘭は競馬のことを言っている小五郎に多少ムカつきつつもあわてた様子で言った。

ニセ蘭「競馬より大変なことが起きたのよ！」

小五郎はそのただならぬ気配を感じていたので「何だ何だ？一体？」

と言った。

すると蘭は、核心のことを言った。

ニセ蘭「少年探偵団が拉致されたのよ！」

小五郎は『誘拐』の言葉に反応したので、「わかった。すぐに行く！！」と言った。

一方、コナンは目暮警部に連絡した。

『T r r r r . . . 』

目暮「はい、目暮だ。」

コナン「もしもし警部さん。いまさつき少年探偵団のみんなが拉致されたって言う犯行声明の手紙が届いたからすぐに来て！！」

目暮「わかった、コナン君。すぐに行く！！」

電話切断後 警視庁 捜査一課

目暮はこわばった表情をし、真剣な刑事の目つきで白鳥・佐藤・高木・千葉の4人に言った。

目暮「毛利君のところに少年探偵団の子供達が拉致されたという犯行声明がコナン君に届いた。今すぐ毛利探偵事務所へ急行だ！！」

佐藤・高木・千葉・白鳥「はい!!」

続いて新一は、阿笠博士のところに電話した。

『T r r r . . . 』

阿笠博士「はい阿笠」

阿笠は普通に電話に取ったが、コナンの急いでいて、何かあったような声を聞いた。

コナン「オレだ!」

阿笠「何じゃ、新一?」

コナンは急いでいて、言いたいことを早口で言った。

コナン「少年探偵団が拉致された、今すぐ灰原を連れて探偵事務所へ!!」

阿笠「わかった。今すぐいく!!」

阿笠も、コナンの声色と内容を聞いて哀を連れて毛利探偵事務所まで走っていった・・・。

コナンは少年探偵団が持っている改良型探偵バッジ（全てに携帯電話機能つき）で交信を試みたが失敗。応答はまったくなかった。

15分後・・・

毛利探偵事務所に警視庁捜査一の5人と、小五郎と阿笠、それに哀がやってきた。

目暮・佐藤・高木・白鳥「何があったんですか!？」

小五郎「何があったんだ!？」

阿笠「何があったんじゃない?」

コナンと蘭は、拉致の事情説明をし、コナンは”あの事”を話そうとした・・・

「コナンと哀のふたりだけのヒソヒソ話」

哀「工藤君。あなた本当に話す気？」

哀はコナンに冗談じゃないと言わんばかりの表情と声色で言った。

コナン「ああ。蘭にはとっくに話した。お前のことはまだ何一つ話していないが。」

コナンと哀は精神も身体も大人の人間同士が話しているところから離れたところで『正体をばらしていいのかどうか』かなり言い合っていた。

もちろんコナンは『賛成』を、哀は『大反対』を言い合っていた。しかし、一向に合意を得られず、時間だけが過ぎていった。

コナン「わかった。俺だけが本当のことを話そう!それでいいな?」

そのコナンの一方的な発言を哀は渋々認めた。

哀「・・・分かったわ。その代わり何としても私の正体だけはばらさないでね？」

コナン「実は、俺は本当は小学生じゃなく、とある国際犯罪組織のメンバーの製造した毒薬を飲ませたんです。本当の俺は、高校生探偵の工藤新一です。」

博士、蘭以外の人は驚愕していた。

目暮・白鳥「何だって！？本当か？」

しかし、ここでたった今正体を知ったはずのあの2人は驚かなかった。

高木「やっぱり、佐藤さんの言うとおり、コナン君はただの小学生じゃなかったんですね？」

佐藤「・・・そうね。でも本当にそれできるのかしら？」

彼ら2人は冷静に考えていた。そして、高木と佐藤は自分の『ただの小学生じゃない』という予測が当たったものの、『人間が幼児化する』なんていうSFチックな事を信じられるはずはなかった。

高木は疑問に思っていることを佐藤にぶつけてみた。

高木「どうやって工藤君はコナン君になったのか・・・佐藤さん、何か方法があると思いますか？」

この問いに佐藤は何も答えることができなかった・・・

第5話 第1章 少年探偵団誘拐（前書き）

今回は、少し時間をさかのぼって『少年探偵団を拉致した』時間で話が進んでいきます。

第5話 第1章 少年探偵団誘拐

一日目 軽井沢 16時47分

少年探偵団は、歩美の幼稚園の頃からの友人、栗原かなの家族と軽井沢でキャンプをすることとなった。

栗原かなの家族は、父と母の3人家族で、父はサラリーマンだが、母は元モデルで、今はファッションコーディネーターをしている。ついでに、歩美と同じ幼稚園だったが、かなは歩美たちとは別の私立小学校に通っている。

テントの外で、かなの父親と母親が言い争っていた。

かなの母「もう・・・まったく、アナタって本当におっちょこちょいなんだから・・・」

かなの母は困惑の表情をしていたの、ちよっと笑っていた。そして、彼女が話している相手とは、夫だった。

かなの父「ごめん、まさか炭を忘れるなんて・・・」

かなの父は、車に荷物を入れる際にバーベキューでは必携の『木炭』を忘れてきてしまった。かなの母は、呆れながら言った。

かなの母「今日は管理人さんが早くに帰っちゃったし、近くのお店までは10km以上・・・。じゃあ、こうなったらみんなで協力し

て夕食のためにみんなで薪を探しに行きましょう。」

かなの父もしぶしぶ決断した。

かなの父「そうだな・・・そうしよう。」

そしてそう言うのと、子供たちを呼び寄せた。

（やさしそうな大声で）「みんな～こっち来て～!!」

そんなアクシデントを知らずに遊んでいた子供たちが駆け寄りながら声を発した。

子供全員「はあ～い。」

そして子供たちが集まると、かなの父は事情を説明して子供たちに頼み込んだ。

かなの父「という事で・・・みんなはこの山の中で薪を拾ってきて欲しいんだけどいいかな？」

その他のみに、元太は勢いよく言った。

元太「OK!、任せときな。おっちゃん、おばちゃん。俺達は事件だって解決したんだからな。少年探偵団出発!!」

その元太の声の後、子供たちはみんなで声を合わせて言った。

子供全員「エイ、エイ、オウー!!」

軽井沢山中

元太が威勢の良い返事をし、みんなもそれに乗って言うてから30分が過ぎていた……。元太は元気が無く、疲れた様子で光彦に言った。

元太「おい、光彦。見つけたかあ？」

元太はとても疲れた様子で、しかも、体中汗だらけで光彦の聞いた。

光彦「そりゃもちろんって元太君、何で1つも見つけなかったんですか？」

光彦は、元太の手を見てびっくりした。彼は薪を一つも持っていなかった。その代わり、別のものを持っていた。

元太「ああ、途中でキノコっぽいのがあって、そこでそのキノコを食べてたらさっき、光彦に声をかけられたんだよ。」

元太は薪では無くキノコを持っていた。光彦は、自分が見たことの無いキノコだったので、怪訝な顔をして元太に聞いてみた。

光彦「げ、元太君、キノコ図鑑見ましたか？」

すると元太は「みてねーぜ。」と何気なく言った。

光彦はこの元太の答えに驚いた。

光彦「元太君。何でキノコを図鑑なしで採ったんですか？キノコと野草はよく図鑑を見たり、専門家の人と行かないや、死にますよ！よく野草が取れる季節にニュースでやってるじゃないですか！？」

元太は、今にでも死にそうな恐怖の表情をして言った。

元太「マジかよ！？キノコと野草は死ぬものがあるのかよ！！？」

光彦は驚きながら自分の懷に隠し持っていた『良く分かる★野草・キノコ図鑑☆』というものを取り出して調べた。

光彦「・・・なにに・・・げ、元太君、良かったですねえー。これ、最近流行ってるダイエットキノコですよ！！（作者注…実際にはないんでしようが・・・。ついでに、→にあるようなキノコ採りを無知な方がすることは毒キノコを採って死亡する可能性があることから大変危険ですので、冗談ではなく、本当にガイドブック等をよく読まれるか、専門家の下で行動しましょう。）」

元太「ダ、ダイエットキノコ？」

元太は『ダイエット』という言葉に反応しなかったが、代わりに歩美が反応した。しかしその瞬間、彼らは全く気づかなかった黒の組織の構成員にクロロホルムをかがされた。

光彦「あっ！？・・・バタッ・・・」

歩美「光彦く・・・バタッ・・・」

元太「おい、光彦、歩美・・・バタッ・・・」

かな「・・・エッ!?・・・バタッ・・・」

そして、それをした張本人たちが声を発した。

組織構成員A（コードネームは無し）「ミッション成功」

組織構成員B（同じくコードネームは無し）「それにしても最高だった。」

そして、彼らは報酬の計算をしていた。

組織構成員A「そうだな、これで1人10万っていいよなっ!!」

組織構成員B「4人なら、40万か・・・。100メートル先の駐車場の依頼者のお偉いさんのところまで行くか。」

こうして彼らはそのお偉いさんの所に向かった。

この組織構成員の兄弟は静岡の孤児院で育ったのだが、16歳のとき組織が簡単に洗脳できるという、組織が孤児院から100万円で3人買った子供の2人だった・・・。

駐車場

ここは観光客にも使われる駐車場だった。人目につかないようにす

るために、少年探偵団たちはダンボールに入れられていた。

2人の男に話しかけた男がいた。彼はウォッカだった。

ウォッカ「お疲れさん。」

ウォッカの顔を見た組織構成員Aは、早速金の話をしだした。

組織構成員A「子供やるから報酬を・・・パシユ・・・」

ウォッカは、構成員を射殺した。この時間はたまたま誰もいなかった。ここで射殺したという。

組織構成員Aはウォッカによってサイレンサー付拳銃で射殺されたが、トイレに行っていて、

組織構成員Aに子供を引渡し任せてたBのほうは生きていた。

組織構成員B「兄ちゃん・・・」

そこには、もう既に子供たちを入れた段ボール箱は無く、ウォッカも、彼の乗っていた車も無かった。そして、唯一残っていたもの・・・それは、組織構成員Aが胸に1発だけ撃たれていた遺体だった・・・。

第6話 第1章 悪魔の声と国際協力の序章（前書き）

作者より

注意…この話の中ほどに少し『グロテスク』な表現が1箇所あります。

もしもこの話で頭の中でアニメを組み立てながらみている方がおられましたら、その描写の仕方に十分ご注意ください。

第6話 第1章 悪魔の声と国際協力の序章

彼らが『コナンが幼児化した方法』を討論していたとき、阿笠が「毛利探偵事務所では面積が狭いじゃろ?」と言ったので、一向は阿笠邸に向かう事にした。

阿笠邸

彼らが、阿笠邸に着いて15分頃経ったときに、ちょうど電話が鳴った。

『T r r r r』

阿笠は、コナンがここにいることを知って、「誰からじゃろう。まさか犯人からか!?」と言った

高木も阿笠の考えに同調し、高木自身の考えで「犯人からかもしれないので、逆探知をします。」と言い、逆探知をすることにした。

阿笠が自分の電話を取った。と同時に、高木は係の人間に「逆探知と傍受を開始してください。」と言った。

そして、高木は阿笠に「準備はいいでしょうか?」と真剣な眼差し

と緊張した声で見つめながら聞き、阿笠も慎重な声で「はい。いいですよ。」と答えた。

阿笠「もしもし。」

電話からは男の声がしてきた。音声は加工していないようだった。

「あなたが工藤新一とシェリーを知っている人間か？」

阿笠は新一は知っているが、シェリーは知らないと言う設定にしておこうと思った。シェリーの正体は知らない人がいたからだ。

「え、ええ、新一君は知っておるが・・・」

男は、新一の知人であることは分かったが、肝心のシェリーが見つからないのでシャリーの事を執拗に聞いた。

「シェリーのほうは？」

阿笠はとりあえずシェリーを知らないフリをしていた。

「シェリーとは誰なのかのお・・・」

ここで男はキレだして、男が知っている『シェリー』の情報を全て言った。

「お前が知らないはずがない。あんたの家にいる『宮野志保』まあ、今は幼児化して『灰原哀』と言う名前になっている見たいだが・・・」

ここで阿笠邸内の空気が変わった。『コナン』の正体は知っていたが、『灰原哀』の正体は今まで知らされなかったのに、この犯人の証言によって知ることになったからだ。

灰原は、電話を傍受しているコナンに怯えながら言った。

「わ、私の両方の名前を知っている人・・・組織からね？でも、ベルモットが？それとも・・・ジンとウォッカ？」

コナンは少し間を置いて言った。

「・・・多分、組織だな。誰の情報かは分からないな。」

そう言っている間に博士と男の会話は続いていた。

博士は男に肝心の『誘拐』をした人間なのかどうかを聞くことにした。

「あんたは、子供たちを誘拐したグループの人間なのかね？」

すると、男はその答えを言った。

「ああ、あのガキか・・・『今のところ』生かしておくつもりはあるが、これからどうしようかなあ・・・バラバラにして殺そうか？それとも、あんたらの元に戻ってくるときには、精神的な復旧が出来なくなる位精神的に破壊した『殺人マシーン』にでもしておこうか？そうすればお前達はみんなあいつらに殺される運命になるんだ。どちらにしても面白そうだな・・・ハハハハ・・・」

この瞬間、阿笠邸は犯人の残酷な言動に対して軽蔑した雰囲気になった。

阿笠も男に対して怒りの気持ちを抱いており、今ここで怒りたい気持ちには山々だったが、男に怒ろうとしていたその時、『阿笠さん、怒りたい気持ちは分かりますが、今それをしてしまうと男に電話を切られる』と言うメモを高木刑事からもらったので、必死に耐えて、唇をかみ締めて男に聞いた。

「で、ワシは何をしたらいいのかのお？」

「ジジイはそこにでもおれ。オレは、『ジェリー』こと『灰原哀』に一人で『米花港』のTN倉庫に来てもらいたい。そうすればガキ

達は返す。」

そう言う男は一方的に通話を切ってしまった。

電話切断後・・・

高木は通信技師に逆探知について聞いていたが、結果は、『国際電話回線や、IP回線回線などの複数の電話回線を使っていて解析ができない』と言うことだった。

毛利探偵事務所に逆探知機能を備えた機械が幾つも並べられ、毛利探偵事務所下の『喫茶店ポアロ』内やその前の道には、誘拐してきた相手が相手なので拳銃で武装した所轄の私服警察官総勢約15人が3交代で警備していた。

阿笠邸のほうは、やはり、毛利探偵事務所と同じような通信機器が幾つも並べられ、工藤邸の庭に設置したテント張りの施設を本部とした警察官詰め所を作り、そこには、毛利探偵事務所と同じように、15人で3交代の拳銃を持った所轄警察官がいた。

毛利邸から250メートル離れた空き地には、臨時の機動隊警備詰所が設立されて、そこを警備本部にし、毛利探偵事務所から半径1キロ圏内で3箇所の検問を実施し、米花市内では、警察官は毎日パトロールを行う事態となり、付近にある帝丹小・中学校とその他の公立学校、合計6校では半日登校か臨時休校をすることになった。

さらに、警視庁公安部や公安調査庁を中心としたヒューミント活動

を行う組織が、これに便乗したテロを起こしたり、もしくは『組織』の一部などである可能性があるといい、そうだと疑われる暴力団やカルト宗教（〇〇真理教のようなもの）において実施され、また、犯人が米花港のTN倉庫にいるのかどうかを探らせるために、数人の人間を港灣関係者に成り済ませた・・・

毛利邸の向かい側の建物では極秘で、黒の組織対策で毛利邸を監視していたFBIが、この異変に気づき、日本警察や監視対象である毛利小五郎一家と顔見知りであるジョディー・スターリング捜査官に連絡。彼女はコナンに事の真相や捜査状況を確認するために電話してきた。

阿笠邸

『ピンポン』

阿笠邸のドアのチャイムがなった。

コナンがドアを開けると・・・

コナンは「ジョディー先生。どうしたの？」

ジョディー「さっき、FBIから、毛利探偵事務所の前が騒々しいーからと連絡があつて、毛利サーンが心配だったんですが、向こうには誰もいなかったんで、阿笠邸こっちに来たんです。」

コナンは、事件のあらましを説明した。すると彼女は

ジョディーは、「わかったわ。すぐに日本に捜査官を入れて私達FBIも全面的協力をするわ。そういう大事件になってるのなら、多分認めてもらえるでしょう。そこに一番上の階級の方はいろの？」

コナン「わかった。目暮警部に来てもらうね。」

コナンはそう言うと、目暮の耳元で言った。

「警部、ジョディー先生が警部にどうしても話しておきたいことがあるから来て欲しいようです。」

目暮は親しみを込めて言った。

目暮「ジョディー先生、お久しぶりですなあ。話しておきたいことって何ですか？」

ここでジョディーの『FBI捜査官』モードにスイッチが入った。後に、目暮警部は、この時の事をこう話してくれた。

『この時に彼女の真の目的が分かりました。この”黒の組織関係”のために私を呼んで話そうとしてたのかと。彼女の目で、私はきつとアメリカ辺りの捜査官だろうなと思いました。まあ、これは刑事の勘ですね。』

ジョディー「実話私、FBI捜査官で、さっき彼の話を聞いて、クールキッド犯行組織が、私たちが20年以上前から探していた組織なので、捜査協力したいのですが。もちろん、すでにFBI長官直々の許可はあった今、いただきました。」

目暮は、コナンから『黒の組織』のことについては大方聞かされており、アメリカでも暗躍していることを聞いたので、ジョディーの捜査協力要請を快く受け入れた。

早速ジョディーは今回の事件のあらましを聞いた。

「この事件の説明をしてください。」

目暮「この事件は・・・」

目暮はこの誘拐事件と、犯行声明文の内容について話した。

目暮がジョディーと捜査協力を受けているとき、元太・光彦・歩美の両親には、警察が『お宅のお子さんが、軽井沢で誘拐されました。』と連絡を入れており、光彦・歩美の父は職場を休み、元太の父は小嶋酒店を『諸事情のため、本日はお休みします。』といって休み、光彦・歩美の父とともに、コナンへ来た予告状で、米花港に現れる可能性があるために、所轄の米花警察署にいた。

元太の母と歩美の母は気を失って倒れていて、新出病院のベッドにいた。

光彦の母親は出張で北海道にいるため、そこから戻っている最中だった。

第7話 第1章 暗黒な女と真っ白な女

組織の倉庫（蘭が居るところ）

1日目の夕方・・・

蘭「・・・ふああ・・・ここはどこ？」

蘭は丸1日寝ていた。すると、彼女が行った事も無い様な家にいた。

ベルモット「やっと起きたようね。」

蘭は少々寝ぼけながらも、自分の目の前に哀を一度拳銃で殺そうとした高飛車で外国人の女が自分の前に、ガラス越しではあるがいるのが見えた。

蘭はその女であることは分かったが、一応念のために聞いてみた。

蘭「あなたは・・・前に哀ちゃんを殺そうとした人ですか？」

すると、ベルモットは

「A secret makes a woman woman.」
と静かに言った。”YES”とも”NO”とも言わなかった。

蘭は、自分ををここから出そうとして精神統一をして『バン、バン』とガラスを破ろうと足で蹴った。しかし、彼女の力では破れない・・・

蘭は、倉庫の中にある阪神淡路大震災に使われていたような仮設住宅位のスペースに、体を手錠やロープなどでつながって・・・いなかった。しかし、ドアは蘭の側から開かないようにしており、鍵はベルモットしか持っていない。それに、窓ガラスか蘭が空手の都大会優勝という成績であることも考慮し、組織の一員である世界最大手のプラスチックメーカーの会長に某軍が発注した透明の耐銃撃・衝撃特殊ガラスを張ってるので、それを蹴破るのが蘭でも、京極真でも、亀田3兄弟でも、世界の格闘家を集めても破れないのである。そしてこれらは、あの方や日本支部の支部長であるジンに気づかれること無く、自らの部下を使ってやっていた事であった。（ウォツカには上司からの命令ということで口止めさせた。）

ベルモットはその透明な板を蹴破ろうとしている彼女を見て少し悪びれたような表情はしたものの、すぐにケロッとして元の高飛車の女に戻って言った。

「ちよつと、それは対衝撃ガラスだからそんな事をしてても無駄よ。ここからあなたを出せないわ。でも安心して、あなたは殺す様な事はしないわ。それに、あなたが少しここに居てくれたらいいだけ。その内あなたを無事に家に帰すわ・・・」

蘭は『唯一』彼女に気になっていたことを話した。

蘭「貴女^{アナタ}にいつ聞きたいことがあるんです。貴女、どうしてあの時哀ちゃんを殺そうとしてたのに、私が出できたら『Move, it, angel!』と言ったんですか？そして、哀ちゃんを殺そうとしてたのに、哀ちゃん共々私を撃ち殺そうとしなかったんですか？」

ベルモットは数秒ポーカーフェイスを保って黙っていた。しかし、

彼女はどうしても答えが欲しい蘭の表情を見てみると喋らない訳にはいかなかった。しかし、彼女の中で、『ありのままのまんじょかくしておきたいこと本心』と『偶像』が交錯していた。

ベルモット「・・・やっぱり止めにするわ。あなたに話すのはもうちょっと後にするわ。それに、あなたを殺したくは無いから・・・」

蘭は、答えをくれない彼女に嘆くようにして言った。
ベルモット

「何で？・・・じゃあ、なぜ私を天使と言ったんですか？私はあなたに一度も会ったことが無いはずなのに、なぜ私が^{エンジェル}天使だと？何でそんな事言われるんですか？」

ベルモットはその蘭の言葉に返す言葉がなかったので、とりあえず他の事を言った。

「それは秘密。とにかく、私の部下毎日3回食事を与えに来るわ。もしも勉強がしたいなんて思ったら、そのパソコンを使いなさい。そのパソコンには高校生の国、数、英、理、社のすべてに十分な内容の問題があるわ。そのコンテナハウスの中にはシャワーもあるから安心して。」

蘭は、誘拐犯であるのにも関わらず、こんな待遇を受けていることに不思議に思った。尤も、不思議だといえば、このベルモットが起こした殺すつもりが無ければ、傷つけるつもりもない『要求なき誘拐』自体が不思議なのだが・・・

蘭はベルモットが帰った後、バッグの中から携帯電話を探し、^{シンイチ}彼の唯一の連絡手段である携帯電話にかけて助けてもらおうとした。蘭「新一に連絡しよう。あれ？携帯が無い・・・やっぱり私を監禁してるんだ。（新一、あなたに会いたい・・・やっぱり、こんなと

きにはいつも居ない新二でも、居て欲しい・・・やっぱり私って新
一のこと・・・」

第7話 第1章 暗黒な女と真っ白な女（後書き）

こんにちは、たくみ226です。

最近テストやら何やらでホンマに疲れた・・・学年末テストは今月末・・・まだまだ疲れるみたいです。

まあ、コナンノベルズがあるからストレス発散と言えばおかしいですが、趣味に集中できるんで精神的に問題ないですね。正直、自分の身の回りに何か好きなもの（コナン）がなかったらやっていけるか不安です。これって完全に『コナン中毒』なんかなと思います。

土・日にまとめてストックを作るか投稿するかして進めよう・・・まだぜんぜん進んでませんから。

プライベートなことを言うと、実力テストの物理の23点は赤点でないだけ良かったですが、本当に散々でした。数学1も半分なさそうだし、文系だからっていてもひど過ぎの点数だし、その他の事に関しても悩みの種はつきません。

第8話（2日目） 第1章 少年探偵団救出と血

2日目の夜 米花港

『ブーーン』

米花港に向かってトヨタ・セルシオとトヨタレクサス・GSの2台と、日産・エルグランドとホンダ・オデッセイの2台の車両群が別々ながらも1キロ間隔で向かっていた・・・

『キキイイー！！』

白鳥はトヨタの車両から降りた。

彼と一緒に降りようとした千葉には、手と小声を使って『車の中にいなさい』と言った。

周囲を警戒しながら無線でほかの車両に『私が一人で降りる。ほかの者は少年と少女の安全を確保せよ。』と言い、一人で倉庫の近くまで走った。

白鳥が車から降り、倉庫の方向へ走ると、30〜40代くらいの男2名が白鳥に近寄ってきた。

男「あなたが白鳥君？」

白鳥はホルスターに入っている警察官や海上保安官などで現在現役で使われているニューナンブM60拳銃を片手で取り出せるようにして相手に警戒しながら言った。

白鳥「え、ええ、そうですが・・・あなたたちはどちらの方でしようか？」

すると、男達は、自身のポケット内から、手帳のようなものを取り出した。

男「我々はこういうものです。」

そういうと、彼らは2つ折りになっている手帳の中身を見せた。
すると白鳥は拳銃が入っているホルスターに手をかけるのを止めてから言った。

「あなたたちは・・・公安と内調（内閣情報調査室）の方ですか？」

すると男達は手で人差し指を縦に立てて口につけるような動作をしてから言った。

「困るよ君、ここで喋っちゃ・・・君たちが『監禁された児童達』の回収班かね？」

白鳥はオドオドしながら言った。

「ええ、そうですが。ですがあなた達がなぜ？本当に中に人間はいないと？」

すると、公安警察官のほうが答えた。

「ええ、どこの命令かは機密事項です。私が見た限りはその犯罪者集団らしき影はどこにも・・・」

そして、それに続くように内閣情報官の男も言った

「そうですね・・・しばらく向かいの建物からも監視してましたから。いるとしても2、3人位の少人数でしょう。」

それ聞いて、作戦決行ができると判断した白鳥は言った。

「分りました。現在の時刻は・・・23時40分ですから、20分後の0時丁度で作戦開始でどうでしょう？」

その白鳥の決定で、男2人は自分たちの本部に連絡を入れた。

白鳥はそれを見て、すぐさま走っていった。

白鳥は無線で走りながら言った。

「コナン君。哀ちゃんは、木村巡査部長と小松原警部補と福原巡査部長とで車にいてくれ。」

コナン・哀「わかった。」

白鳥「木村君・小松原君・福原君、一応拳銃は使えるようにしてくれ。念のためだ！」

「高木君・千葉君・上原君・田中君・難波君・木下君も拳銃は持っているね？」

木村・小松原・福原はS&W M3913拳銃を、高木・千葉・上原・田中・難波・木下はSIG P230拳銃を持っている。さらに、白鳥は2つ目の拳銃でSIG P230を所持しており、白鳥と千葉は機動隊等で使用されている強化プラスチック製の盾を持っていた。ボディーマーは全員銃を撃たれる可能性があることから着用していた。

全員「はい。装備は全て持っています。拳銃も実弾装てん全弾OK

です。」

警察官6人は倉庫の扉の前に来た。

白鳥は無線で小声で言った。

「突入時に犯人は銃器を使用する可能性は十分にある。手に拳銃を持って撃てるようにしておけ!!」

突入班全員「はい!!」

扉を開けるとそこには少年探偵団が倉庫の柱に縄で結ばれていた。そして、白鳥と千葉が駆け寄り、盾を持って屈み、バリアーを作った。

そこに木下・難波両刑事が警戒していて、高木・田中両刑事が結んでいた縄をはずそうとしたそのとき・・・

3日目 午前0時00分

『パーン・・・。』
『パーン・・・。』

2発の銃声がほぼ同時に鳴った。

高木「大丈夫ですか？ 木下さん！」

木下刑事は、背中に2発撃たれた。

からは、掠れるような声で高木に言った。

木下「うっうう・・・高木、早く子供たちを・・・」

高木は、大量の出血をしている木下刑事の死期を悟り歯を噛みしめて言った。

「わかりました。すぐに保護します。だから木下さん、生きてください。」

この銃声を合図に、組織の構成員4人は、持っていたトカレフTT—33拳銃を乱射した。

『パンパンパン・・・』

『パンパンパン・・・』

この攻撃で田中刑事は足に2発、上原刑事は腕に1発撃たれた。

難波刑事は田中・上原両刑事が撃たれた後即座に後ろを向き、後ろにいた組織の構成員2人に向かって、拳銃の弾を4発発射した。

『パンパンパンパン・・・』

難波「よし、2人に命中！おそらく即死だ！」

難波刑事は昔、警視庁のSATに所属していて、そのお陰で拳銃の腕が捜査1課の捜査員の中で最もよかったため、すぐに2人の心臓付近に拳銃の弾を合計3発命中させた。

残りの組織の構成員2人は、すぐに倉庫の別の出入り口から逃げた。

『パンパンパンパン・・・』

『パンパンパンパン・・・』

難波刑事と構成員は構成員が倉庫から離れるまでずっと撃ち合った。

白鳥「難波君。よくやってくれた。早く少年探偵団と木下刑事を車の中へ。田中君と上原君は自力で歩いてくれ。」

難波「わかりました。それより白鳥さん。無線で応援を！」

白鳥は無線で何やら話してその後に行った。

「すでに呼んでくれているようなので救急車が着く様だ。木下さんと田中さん・上原さんはそちらに乗ってください。」

白鳥警部は、薬で眠らされていた少年探偵団を起こして倉庫の外にある車に移動させた。

高木・千葉・難波刑事は、背中を撃たれた木下刑事を、車に乗せて

あつた担架を持ってきて外に運んだ。

5分後に警察の応援と救急車が来た。

本庁からも様々な係の人間が呼ばれて、その規模の大きさから現場には松本警視正もいる事態となった。

目暮は、佐藤と一緒に車から出てきた。

「白鳥君。少年探偵団は大丈夫かね？」

白鳥「少年探偵団は大丈夫ですが、木下刑事が背中に銃弾を撃たれて極めて危険な状況です。」

目暮「救急車は？」

警官1「すでにこちらに向かっています。」

白鳥「少年探偵団の子供たちは、かなり衰弱しているようなので、念のために高木君にでも送ってもらって、病院へ搬送します。」

目暮「そうしてくれ！彼らは狙われるかもしれんから、犯人から守ってくれ。」

白鳥「わかりました。すぐに高木君に用意させます。」

「高木君。すぐに少年探偵団の諸君を、病院まで搬送してくれ。」

構成員は、一人は難波刑事の言った通り、銃弾が胸に当たって即死だったが、もう1人は防弾パットやボディアーマーをたくさん着込んでいたので、軽傷ですんでいた。

少年探偵団は高木刑事の車で、木下刑事は救急車で米花中央病院まで搬送された。

彼らは今回の状況やその背景となる状況からまた黒の組織の襲われる可能性があったため、念のために千葉刑事と難波刑事が交代で見張りをすることとなった。

木下刑事は病院で3日目の午前2時15分に死亡が確認された・・・

第8話（2日目） 第1章 少年探偵団救出と血（後書き）

こんばんは、たくみ226です。

木曜日に2つ出せば良いと思いながら進めています。

2月中には新しい話に入れるかと・・・。

だって、今旬のCIA関係に近づきたいですから。結末だけほとんどできてても中身が不味かったら今回そう入れ替えた意味がないですし、『質』と『進度』が今後の課題です。

少年探偵団の健康状態については、つけようと思ったのですが、最後に『おまけ』でつける予定ですが果たしてできることやら・・・まあ、分かりません。

第9話 第1章 正体 〈コナン視点〉

高木刑事がコナンを毛利探偵事務所に送る途中……高木は気になったことを言った。

「コナン君、いや、新一君はあの構成員に見覚えは……」

コナンはその瞬間、首を横に振った。

高木はがつくりしながら言った。

「そっかぁ……あれから生きていた犯人は持っていた毒で自殺するし、班や係は違うけれど捜査1課の上司は死んじゃったし、主犯格はだれも居なかったし……一体どうなるんだ？」

それから、車内は無言になった。

3日目 午前2時48分

毛利邸（探偵事務所）前。

高木は、『毛利探偵事務所』と書かれた看板の真下に車を停めた。
「ここで下ろすね。工藤君。おやすみなさい。」

そう言うと、高木はコナンが降りたことを確認して、車を走らせて行った。

コナンが『毛利探偵事務所』に入ろうとした瞬間、向かい側で、小太りで真黒の服とサングラスをしている男を見た。

「こいつ、ウォッカか？」

コナンの言うウォッカらしき男は誰かに電話していた。

男「例の場所0304に。今から来てください。」

相手「OKウォッカ。Thank you.」

そして毛利探偵事務所の階段から1人の女が降りてきた。

『カッカッカッ・・・』

「誰だ！」コナンは声を荒げて言った。

彼は、もしものために時計形麻醉銃を構えていた。

すると、コナンと面識がある女性が出てきた。

「私よ。私。」

その女は蘭だった。

コナン「なんだ。蘭か。何でお前が今頃・・・こんな危ないときに外に出るんだ？」

「I am not Ran Mori.」

この瞬間、コナンは驚いて何も言えなかった。

「A secret makes a woman woman.」

コナンは、この聞き覚えのある台詞を聞いた瞬間、体中が凍りついた。

「I am Vermouth.」

蘭の格好をしたベルモットは、蘭の変装を解いた。

「I have not seen cooler kid for a long time.」

コナンは、彼女のその言葉を聞くや否や、気性を激しくした。

「蘭の姿で何をしてた？ 蘭はどこだ！」

ベルモットはどうしようもないと言わんとばかりに言った。

「私は知らないわよ。ジンとウォッカが連れ去っていったから。」

コナンは驚いた。

「何だと!!」

ベルモットは逃げる体勢に入った。

「それじゃあ、私はここで・・・」

コナン「待て!!」

『ボーン……………』

ベルモットは、煙幕を使って逃走した。

コナンがベルモットを追いかけようとして辺りを見たときは、この煙幕弾騒ぎを見た探偵事務所警備の警官がやっと来たが、その時、彼ら以外の人間は誰もいなかった。

深夜で油断していたのだろうか？ 警察官は1班10人いたはずだったのに6人しかいなかった。

後の4人は睡眠ガスで寝させられていた。

起きていた警察官は早速本庁に徒歩で逃げた女の搜索をするための緊急配備を要請したが、深夜なので、動ける人間は少なかったため、結局捕まらなかった。

コナンは早速阿笠博士に電話した。

コナン「博士、たった今、ベルモットが探偵事務所から蘭の姿で出てきて、蘭はジンとウォッカがさらってたって言ってた!!」

阿笠は予想外の展開で驚いた。

「何じゃと！ 蘭君が!!」

杯戸公園

ベルモット「じゃあ例のあの女の場所へ」

ウォッカは車でその例の女を監禁している場所まで向かった。

（車はジンのポルシェ356Aではなく、ウォッカの車は、なぜかルノーのヴェルサティスという設定。）

ウォッカは疑問を抱いていたことを聞いた。

「しかし、いいんですかい姉さん？あのガキ殺さなくて・・・」

ベルモットは意気揚々で言った。

「いいのよウォッカ。ただの子供は殺さなくても、解放されても。どっちみち、あの子供たちと関わりがあることは確かだから、『早く出てこないと次はただでは済まない。』という警告にはなったでしょ。まあ、シェリーでもいれば話は別だけど・・・」

ウォッカは最後に本音を吐いた。

「しかし、シェリーは探しても見つからんもんだあ。よくここまで隠れてやる。」

第10話 第1章 正体 〈ベルモット視点〉

警察が少年探偵団が監禁されている倉庫に突入したとき・・・

『プルプルプル・・・（携帯着信音）』

ニセ蘭はその発信先を見るや否やすぐに電話に出た。

「はい。」

ウォッカからの電話だった。

ウォッカは上機嫌で言っていた。

「姉さんですかい？ あっしです。」

ニセ蘭は、そのことには一切触れずに、ただ任務の手順の確認事項だけを言った。

「あら、ウォッカ、手はずどうりに今日私を公園で拾ってくれるのね？」

ウォッカは、電話の外で「チェッ」と舌打ちしていたが、それを悟られるのが嫌だったので、普通の声で言った。

「はい、そうです。」

ニセ蘭「分かったわ。車の用意ができたら連絡頂戴。」

ウォッカ「わかりやした。」

2時間後・・・

『プルプルプル・・・（携帯着信音）』

これから任務というときにもってこいの活きの良い声でウオッカが言った。

「準備完了しやした。今向かい側にいます。」

ニセ蘭は心配した様子で言った。

「ちよつと、そんな事予定になかったけど大丈夫？」

ウオッカは、ここでも上機嫌で言った。

「はい、日本警察しかいなかったんで、睡眠薬入りガスをまいて眠らせやした。」

ニセ蘭「分かったわ。じゃあ、頼むわ。」

こうしてニセ蘭は電話を切り、毛利家を出るを準備をしていた。そして、蘭の料理は普段あまり上手でない事と、レパトリーが少ないを悟ったベルモットは、自らのレシピを蘭の机の上に書いて置いていった。

ニセ蘭「これくらいならいいか・・・あの子ならちゃんとしてくれ

るでしょう。」

後に、蘭はこの料理のレシピ通りに作り、小五郎とコナンからべた褒めされる事となった。

そして、これの中にあつた料理によって、どこかの夫婦が復縁し、その娘が喜ぶのは少し後となったが・・・

こうしてニセ蘭（変装したベルモット）は、毛利探偵事務所を離れて、他人の変装をして杯戸公園に徒歩で向かおうとしていた。

『カツ、カツ、カツ・・・（靴の音）』

その頃、コナンは高木刑事に毛利家まで送ってもらって家に入ろうとしていた。

辺りには起きている人など誰もいない・・・（毛利探偵警護班はみんなウオッカ手製の睡眠薬入りガスで眠らされてるので。）そして、コナンは自分以外の人気と足音を感じた。

コナン「（まさか・・・組織のやつらか？だとすれば・・・ジン、ウオッカ、ベルモット）」

そう思って、自分の身を守るために、時計型麻醉銃をセットした。

コナン「誰だ！そこにいるのは・・・」

コナンは声を荒げた。コナン自身、こんなところで組織の人間にあってたらそれは怖い。なぜならば、1人で単独行動していない場合があるからだ。

ニセ蘭「私よ。私。」

その女は蘭だった。

コナン「なんだ。蘭か。何でお前が今頃・・・黒の組織のやつらが
いる危ないときに外に出るんだ？」

「I am not Ran Mori.」

この瞬間、コナンは驚いて何も言えなかった。

「A secret makes a woman woman.」

「I am Vermouth.」

ベルモットは、意を決して蘭の変装を解いた。

「I have not seen cool-kid for a long time.」

コナンは、彼女のその言葉を聞くや否や、気性を激しくしたのがわかった。

「蘭の姿で何をしてた？ 蘭はどこだ！」

ベルモットはどうしようもないと言わんとばかりにため息をついて言った。

「私は知らないわよ。ジンとウォッカが連れ去っていったから。」

そう、彼をなんとかして守らねば、彼の身をこれ以上危険に晒したら、私はユキコに合わせる顔がないわね・・・尤も、もう有希子と会えるかどうか分からないけどね。

コナンが「何だと!!」と言ったのを聞いた。

ベルモットは、ここで逃げる体勢に入った。

「それじゃあ、私はここで・・・」

コナン「待て!!」

『ボーン……………』

ベルモットは、煙幕弾を使ってこの場から逃走した。

ベルモットはここで怪盗キッド並の早変装をして、一般人に成りすました。

ウオツカの車両内

ベルモット「じゃあ例のあの女の場所へ」

ウオツカは車でその例の女を監禁している場所まで向かった。

（車はジンのポルシェ356Aではなく、ウオツカの車は、なぜかルノーのヴェルサティスという設定。）

ウオツカは疑問を抱いていたことを聞いた。

「しかし、いいんですかい姉さん？あのガキ殺さなくて・・・」

ベルモットは意気揚々で言った。

「いいのよウォッカ。ただの子供は殺さなくても、解放されても。どっちみち、あの子供たちと関わりがあることは確かだから、『早く出てこないと次はただでは済まない。』という警告にはなつたでしょ。まあ、シェリーでもいれば話は別だけど・・・」

ウォッカは最後に本音を吐いた。

「しかし、シェリーは探しても見つからんもんだあ。よくここまで隠れてやがる。」

午前4時20分

神奈川県

横浜港の倉庫

蘭「ここは・・・どこ？」

ウォッカ「起きたのか。」

その瞬間、蘭は得意の空手でウォッカを気絶させた。

ジン「殺すぞ！！」

蘭に拳銃を突きつけたその時・・・

「やめなさい。ジン」

ベルモットが悲鳴のような声で言った。

「今人質を殺しても何の意味も成さないわよ！！」

ジンは、ここで前から疑問になっていた毛利小五郎びいきの理由を聞いた。

「そういえば、前も毛利小五郎を殺そうとしてたときにお前だけはしつこく反対してきたなあ。お前、毛利小五郎と何か関係があるのか？」

ベルモットは少し間を空けて言った。

「あつたらどうなのよ？」

第11話（3日目） 第1章 突入

3日目 5時33分 横浜港

横浜港の港湾地区に入る道路の歩行者用通路で男女2人がいた。

女「この入り口を入ったらあなたはこれとこれを、私はこれとこれを搜索するわ。」

男「OK。応援は？」

女「もちろんいるわ。私たちが行動を開始したら、港の労働者や警備パトロールに扮して搜索開始するようにボスに行ってるし、ほら、そこの駐車場のトラック。あれに彼らは乗ってるわ。」

男「それじゃ、俺を振った彼女を血の海にするか・・・」

女「あなた・・・いくらなんでもその例えはひどいんじゃない？」

女「行動開始ね！」

男「OK！それじゃ・・・」

そういうと、その男女は別々の方向に行ったものの、目的地は同じ『横浜港』の港湾地区だった。

女「まずはこの倉庫に入りましょうか？」

女は、倉庫の中に銃を構えて突入した・・・

しかし、何もなかった。

男は別の倉庫に突入した。しかし、そこでも何もなかった。

彼らが調査する倉庫7つ中、女は3つ、男も3つ搜索したが、何もなかった。

女は、緊張しながら言った。

「ここが最後よ。あの情報がうそでなければね。」

男は、女と反対に余裕の表情を浮かべている。

「なら、俺は俺なりに。」

女はその男の表情が信じられなかったが、彼はある意味、幾度も死線乗り越えてきた事はオーラなどで分っているので女はそう思っていた。

「わかったわ、私は仲間が着いたら正面突破するわ！」

男は冗談や皮肉をこめて心配そうにしていた。

「分ってると思うが、おれ、殺すなよ！！」

女は少しムカつきながら言った。

「失礼ね！前みたいなマネはしないわ。あんな最初のようなマネなんて！！でも、そっちこそ情報を私たちやボスに上げないなんて・・・」

女は、この仕事について、FBI捜査官になった早々に、同じような倉庫突入訓練を受けた。

そのときに、特殊工作をしていた仲間を誤射して重傷を負わした事があった。

男はそのときの教官だった。

女は、その倉庫の斜め向かい側の倉庫で、倉庫の作業員に扮した短機関銃や散弾銃、さらには手りゅう弾という軍隊並みの装備をした人質救出用であるものの本格的な戦闘もできるFBI捜査官での特殊部隊（もっとも、元グリーンベレーやSEALsなどの軍系特殊部隊出身の人間や、在日米軍出向の人がいるなど、軍関係者が多い部隊ではあるが。）がいた。

斜め向かいの倉庫から目標の倉庫まで走ろうとしたそのとき！！

『パシユ、パシユ、パシユ・・・』

何発もの銃弾が消音器付銃から流れ星のように飛んできた。

捜査官A「くそ！やはり狙撃手を用意してやがったか！！」

捜査官B「狙撃手を撃て！！」

この命令でFBIによる狙撃がスタート。たちまち、サイレンサー無しの本格的な銃撃戦に発展した。このとき、たまたま不幸にも、通りかかった港湾労働者3名が、この銃撃戦に巻き込まれてFBI・黒の組織双方の銃弾で死亡した。

その後、やっと組織の構成員を倒して、狙撃手に向けて発砲しようとしたとき・・・

その捜査官が見たものは、倉庫の上にいた狙撃手が、瞬く間に倒れていく光景だった。

捜査官A「もやもやするな！突入だ！！！」

FBI捜査官は突入した。

この突入では、FBI1人、黒の組織の構成員9名（うち5名射殺、4名FBI拘束後自殺）民間人3名射殺の死者、また、FBI4人、民間人2人の負傷者が出た。

そのころ、東京湾、横浜港付近の通常警備をしていた海上保安庁の巡視艇で、横浜港付近の沿岸で銃器の発砲音が聞こえたと言証する複数の海上保安官の証言。また、同じような証言をする横浜港の管理局の係員や、税関職員がいた。そのため、神奈川県警が在日米軍の基地であるキャンプ座間・厚木海軍飛行場・横田飛行場などの警

備用に設置されてあるS A Tも含めて、横浜港付近を陸上搜索、海上保安庁の第3管区海上保安本部の係留されている全巡視船艇群は海上搜索で警戒していた。

米軍も、横浜港でそのようなテロ活動が行わたという情報を聞き、これから日本国内で米軍に照準を合わせたテロ活動が起こる可能性があるとして、対テロ活動の支援をしたいと言う要望があったが、日本政府や横浜市等の地方自治体の強い反対によって行われる事はなかった。勿論、コレには強い伏線があるのだが・・・

倉庫内

女はとても残念そうに言った。

「誰もいないわ。シュウ・・・さっきの銃撃戦で、みんな逃げちゃったのね！」

男は、全てを知ったような口調で言った。

「そういうな。この調子だとおそらく作戦前から向こうは分かかって、我々を皆おびき寄せる為の罠だったかもしれないな。」

同時刻

そのころ、首都高速湾岸線走行中の4台の車列の中に1台の車では・

ジン「やっぱり来やがったか。FBIの野郎。」

ウォッカ「入り口が1つだけだったんで、こっちの偵察員が容易に発見できたのだろうが……。あの女、どうするのですかい？」

ジン「とりあえず、支部の監禁室にでも置いておこう。そうすれば、そのうち無能な探偵、毛利小五郎が来て、それから2、3気になることを吐かせよう。それでやつらの周りの人間を皆殺しすれば、シェリーは自ら出てくるでだろう。」

ウォッカ「そっすね。」

ベルモット「あなたたち、まだそうやって毛利探偵を殺そうと……」

ジン「お前、やっぱり毛利探偵と何か関わってるんだろ？」

ベルモット「だから、シェリーと全く関係なくて、日本警察やFBIの監視下にある人物を殺せば、私たちがヤバイんじゃないの？」

こうして、少しずつだが、ジンとベルモットの間には確執ができていった。

第11話（3日目） 第1章 突入（後書き）

こんばんは、たくみ226です。

明日は中学生が自己推薦入試ということで学校が休みなので今日・明日は普段より多く投稿出来ると思います。

今回で『第1章』は終了します。引き続き第2章もお楽しみにしてください。

本文中の『伏線』・・・これはかなり『軍事的・政治的』にマニアックな展開にしてるんで、ここでは出しません。もしも見たいと言う方が折られましたら直接メッセでお願いします。（作者さん以外の方については、要メルアド付でお願いします。後日小説として送ります。）

第12話 第2章 大阪の甘い誘いと危険への道

3日目 大阪 改方学園

そこ学校には、大阪府警刑事部長の娘遠山和葉と、遠山和葉と幼馴染の大阪府警本部長の息子で、関西地区で大人気の高校生探偵である服部平次がいる。

服部平次と遠山和葉の2人は幼馴染の仲良しで、幼稚園からずっと同じクラス（本人達曰く、腐れ縁）なのだが、普段学校内ではクラスメートから『お前ら本当の夫婦か？』などの冷やかし受けるため、それを防ぐために、校内、クラス内では極力会話は避けている。

平次は昼休み、学校内では電源を切らなければ即没収でかつ、反省文を書き、さらに保護者に取りに来てもらわなければいけない規則になっている携帯電話の電源をホームルーム内点け、メールチェックをしていた。（もつとも、こういう校則があってもクラスの7、8割人間はマナーモードにしていたりし、周りの生徒は、平次や他の生徒がメールチェックをしている時も誰も注意はしないが・・・）新着メールを確認して、メールを見ると、送信者江戸川コナン（工藤新一）のメールがあったので、すぐ見た。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

差出人…工藤新一（江戸川コナン）

件名…助けてくれ！！

本文・服部、実は、俺の体を小さくしやがった黒ずくめの男のジンから手紙が来たんだ。

蘭を誘拐していったみたいだし、ほかにもたくさん問題があるんだ。

服部、こっちに来て助けてくれ!! お願いだ!!!!

工藤

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

そのメールを確認したとき、後ろからあの女の声がした。

「何してんの? 平次。」

後ろから、あの女の声がした。そう、彼と幼馴染のあの娘か…

平次は、約束を破った彼女に小声で怒っていた。

「ああ? 和葉か・・・ってここであんまり話すなっていったやろ!」

しかし、和葉は、メールの内容が気になっていたので、小声で平次に言った。

「ああ、せやけど・・・今の誰からのメール? まさか、どっかのしようなない女とメールでもしてるんちゃうかって、あんたのお姉さん役として心配なんや。」

平次は、和葉のそんなしようなない説を聞きながら、メールの発信先のことを言った。

「ああ、くど・いや、東京のコナン君や。」

和葉「コナン君から？で内容何なん？」

平次は少し間をおいて、このことを隠しておいて、ほかの理由で言った。

「えっ、こんど東京に来てって。」

そこで、和葉がちょっと甘い声を出していった。

「へえ〜。あ、そうそう、こんど東京に行きたいんやけどええ？」

平次は、普段から東京に行く事くらい普通にしていることだが、今回に限ってそんな『甘え』を見せてると言うことは何か裏があるとは思っていたが、恐る恐る聞いてみた。

「何でや？」

和葉は、今までよりも小さな声で言った。ひとつ間違えると周りから『デート』いや、『新婚旅行』なんて言われて冷やかされなれないからだ。

「実は・・・東京にあるフサエブランドのショップの招待券を前にあの宝塚のチケットくれたオバちゃんにもらったんやけど、行かれへんようになったからって言ってその券をくれたから。」

平次は、別に割引券位のことで行くことはないと思った。

「別にそんなやつたら行かんでもエエやん。」

しかし、彼の『表面上』ではそういていたものの、『本当の気持ち』は違っていた。

『もしも一緒に東京に行ってもたら、蘭さんが拉致されたのが分かってまう。そんなことだけは避けなあかんのやけど・・・ほんまどうしよう??.』

和葉は、平次の裏の気持ちを知らなくても、ただ、もったいない一心で言った。

「そやかて、1万円分のお買い物券と、抽選で海外旅行が当たるチャンスがあるんやから・・・そんなチャンス逃がしとくないし・・・」

平次は、和葉の身から危機を少なくしようと別の案を提示した。

「ふうん。そないやったら、お前の女友達と行ってきたら良いやん。」

和葉は、ちょっと悲しそうに言った。

「でもな、平次、カズミンも唯衣ちゃんも奈央ちゃんも誘ってんけど、部活とか家とかの用事があって一緒に行かれへんって言われたんや。」

平次「それで俺と？」

和葉が必死にて平次に頼み込んだ。

「うん、そうや。ほんなら、コナンくんどこ行くついでについてって欲しいなあゝなんて・・・」

平次はさすがにここまで言われても断っておける人間ではなかった。「分かった・・・ならあさっての土曜日に行こか？」

『キーン、コーン、カーンコーン……』

和葉「じゃあ、あさってヨロシクな。」

平次「ええ？ ああ・・・分かったわ。（ついでに工藤の所行ってあの話聞こっか。）」

そういう事で、平次と和葉がこの決戦に巻き込まれることとなった。

第13話 第2章 事件への道

平次と和葉は、次の日がちょうど学校の創立記念日だったので、その日を利用して、飛行機で大阪空港（伊丹空港）→羽田空港（東京）に向かう事にした。

京阪電車車内

和葉はやっぱり疑問になってることを聞いていた。

「それにしても、何で平次はわざわざコナン君にそんなに会いたいの？」

「あ、ああ、それはな・・・（どう言うたらいいやろ？）」

平次は疑問を隠しつつ答えようとしたものの・・・

車掌「まもなく、門真市、門真市です。大阪モノレール、大阪・伊丹空港へはお乗換えです。」

こんな事が続いたので、和葉は、電車の中では平次から踏み込んだ答えがもらえなかったのだ。

大阪空港（伊丹空港）ロビー

和葉は少し困った様子で平次に言った。

「平次、航空券のチケット取ってる？アタシってないんやけど・・・」

平次は、そんなことだろうと思い

「ああ、そんなことか。一応、オレが席とつといたで。」と言った。

「ホンマに。アタシの分も？」

和葉は嬉しそうに言った。

平次は、その和葉の顔を見れて嬉しくなったものの、ちょっと言葉に詰まった。

「ああ、せやけど・・・」

なぜなら、平次は、母の静華から『平次、いくら女の子（和葉）から誘ってきた言うても、男が航空券くらい取っとくもんや！それも自分の金でな！！』なんていわれたので、平次の小遣いから、2人分の往復航空券をかうハメになったのだ。ついでに、関西国際空港に行くために、京阪やモノレールに乗ったので、その分も平次が払う事になった・・・

平次は、心のなかで嘆いていた。

「トホホ、今月始まってすぐやのに、今月のやり繰りどないしよう・・・」

「平次、航空券とってくれてありがとう。まあ、平次とアタシが隣の席なんがちよっと気に食わんけど・・・」

和葉は、心の中で『平次、ほんまにありがとう。』と思っていた。

平次は、軽い口調で言った。

「（ハハ・・・）なら代えよか？」

和葉は、笑顔で平次に言った。

「いや、べつに代えんでいいよ。それで・・・チケットありがとう。」

平次も、さすがに幼馴染の好きな人（初恋の人？）の笑顔なんか見せられたりしたら、もうたまらないのだった。

こうして大阪空港（伊丹空港）→羽田空港への航空機に乗り込んだ。

これから事件が起こることはつゆほども知らずに・・・

第13話 第2章 事件への道（後書き）

国内線へは伊丹空港（大阪空港）のほうが良いみたいなので、そちらにしてみました。

寝屋川市

3 駅 京阪本線・淀屋橋行 200 円
門真市

12 駅 大阪モノレール 540 円

大阪空港（大阪モノレール）

第14話 第2章 国内線飛行機殺人事件前編

東京行きの飛行機内 ボーイング747-400型機

「本日は、ジャパン・アジア航空をご利用いただきありがとうございます。当機は、これより東京の羽田空港に向かいます・・・」

『ゴーーーーッ』

『ZZZ……』

この機内では、和葉も平次も朝早かったため、2人共寝てしまっていた。しかし、平次はこの後、起こされるのであった。

愛知県上空 飛行機内

キャビンアテンダント「キャーーーーー!!」

乗客「ザワザワ・・・」

キャビンアテンダントの悲鳴で、寝ていた乗客が起き上がったり、何があったのか見に行く人間が現れた。

平次も、この声を聞いておきた人間の一人だった。

「ん、ん・・・何があつたんやろ？」

アナウンス「ピンポンパンポーン・・・た、ただいま、機内で急病人が発生しました。お客様の中心に、お医者様か、看護師の方が居られましたら、至急、近くの係員までお申しだしてください。繰り返し乗客の皆様にお願ひがあります・・・」

平次「すみませうん。そこで騒いどるのホンマに急病人なん？」

それに乗客があわてた様子で言った。

「あんちゃん。向こうに死体みたいなんがあつたで。行かん方がええわ・・・」

トイレ内

医者は残念そうに言った。

「・・・この方は、もう亡くなられています。ええ・・・」

キャビンアテンダントはいやいやながらも、胸に『重大事故報告書』を抱え、ペンを持ちながら医者を見ていた。

「では、死因は？」

「こりゃ、病死とちゃうやろ？殺人事件や！」

トイレの外からその話を聞いていた平次が言った。

キャビンアテンダント「えっ・・・殺人事件？」

医者は、キャビンアテンダントに言った。

「はい。大変言い難い事なのですが、この方はおそらく睡眠薬が何かで眠らされてから、頸動脈を斬られたかと・・・でもあなたは？なぜそれが分かるのでしょうか？」

平次が事件を聞いて、現場のトイレに急行し、偶然機内にいた医師と検視をしていた・・・

平次「ああ、そうや。こんなやり方自分でできんから自殺ちやうやろし、機内に遺体を持ち込めるわけ無いからな！！この機内の中に殺人者が居るんやろうけど、無差別かもしれんから東京に着いたら警察を入れてもうてから、全員を身体検査せえへんかったら証拠なんて見つからんかもなあ・・・まあ、まず証拠なんて見つからんやろうけど・・・」

平次の隣から女性が言った。

「これは無差別殺人事件じゃないわ！！あの人たちの中の誰が殺したのよ！！！」

平次はこの瞬間『この女、この男知ってるな！？』そう心の中で思った。

平次「へえ。あんた、容疑者知ってるんか？」

女「申し遅れました。私は東山香澄ひがしやま・かすみというものです。」

平次は、疑問になっている被害者との関係を聞いた。

「被害者を知ってるみたいやけど、どういう事や？」

東山香澄「殺された彼は、中山隆なかやま・たかしというんですが、消費者金融の社

長で、特に中小企業向けのローン会社を軸にしている人なんです。」

平次「それで、その金借りてる人とは誰ですか？」

東山香澄「はい、恨みを持つくらいの人で、この飛行機に乗ってるのは、確か・・・そこにいる鉄工所を経営してる井原太一郎さんいはら・たいちろうと、自動車部品工場を経営してる林亨さんはやし・とむる、あと、韓国料理屋を営んでる河鳳柱さんハ・ボンジュと、銃器専門店を営んでる山本健太さんやまもと・けんたの4人です。」

平次「ほんなら、彼ら呼んでくれませんか？」

東山香澄「はい。」

男が、そわそわしながら東山香澄に言った。

「どうしたん、香澄？」

東山香澄は、その男を見るや否やあわてた様子で言った。

「あなた・・・そこに社長が殺されたの。」

男？「何だって！？中山さんがか・・・申し遅れました。私は東山香澄の夫で、東山大樹ひがしやま・ひろきというものです。実は、殺された人は、うちの会社の社長なんです。」

平次「そうなんですか・・・ほんなら香澄さん、その容疑者を呼んでくれへんか？」

香澄「はい、分かりました。」

こうして東山香澄は、容疑者4人を殺人のあったトイレに連れて行かせて、服部平次の事情聴取が始まった・・・

平次「まあ、あんたらがこの殺された中山隆さんと知り合いなんで、どんな人やったんかと、アリバイを聞かせて欲しいんやけどいいよな？」

4人と東山夫妻「はい。」

平次「まず、東山さんから。」

東山大樹「はい、僕は、妻と新婚旅行に行く途中なんですけど、私の弟が成田からの便を取ってたんで、この便で羽田まで行ってから、電車で成田まで行こうとしてたんです。中山社長の下で3年働いてます。それで、私も妻もお金などは彼から借りてませんし、トラブルはありません。それに、飛行機に乗ってから、私と妻は一度も席を立てませんし、単独行動もしてませんので、アリバイは成立なはずですよ。」

平次「すみませんが、夫婦などの親密な関係がある人の証言は口裏合わせがしやすいからアリバイ証明にならないのや。次は香澄さん。」

東山香澄「はい。私は彼と同級生で、出身高校が一緒なんです。職業は、大阪府警本部の刑事部捜査一課の警部補です。彼との間に特にトラブルはありません。」

平次「へえ、あんた、府警本部のひとなんや……。次は……林さん。」

林「はい、私は、彼の会社から1000万円のお金を借りていてるんですが、返済のかたがつきそうだったんで今回、その大口契約を

してくださるメーカーとの契約調印をしに行く途中だったんです。この右隣のトイレに行ってたんでアリバイはあると思うんですが。それで、キャビンアテンダントの悲鳴が聞こえるまで入ってたんです。」

井原「私は、家族旅行をするためにこの飛行機に乗り合わせていました。彼からは、1500万円の借金をしてましたが、それはもう10年前の事です。家族といたんでアリバイがあります。」

河「僕は、彼の会社から、4100万円を韓国料理店の店舗拡大事業の資金として借りてたんです。この隣のトイレに行ってたんでアリバイはありません。」

山本「オレは、1億2000万円を借りてたんです。それで、借金の方が宝くじの1等で返せるようになって、中山さんに連絡したら、彼もオレも、偶然同じ日に東京に行く事になってたんで、明日朝10時に、ミズホバンクの日本橋支店で落ち合うようになってたんですが、まさか同じ飛行機だったとは・・・」

平次「ほんなら、また用があったら来てもらいますんで、分かりやすいように近くに固まっています。わかりましたね。」

全員「は、はい。」

平次はそういうと、近くのキャビンアテンダントを呼んでひそひそ声で言った。

平次「あの、キャビンアテンダントさん。この証言者全員をが証拠隠滅しないか監視したいんで、あの人らをひとつの場所に固めて見

張っててください。」

キャビンアテンダント「は、はい。分かりました。」

こうして、キャビンアテンダント3人は、重要参考人6人を監視することにした。

機内の席で、黒い服を着ていた男2人がいて、ひそひそ声で喋っていた……。

男A「あの服部平次、高校生にはなかなかやりますねえ……まあ、血の気が多いのは多少問題でしょうが、やっぱり西の名探偵だけありますね。」

男B「ああ、そうだな。まあ、お手並み拝見というところですか……」

男A「そうですね……この事件の推移を見守りましょう。」

第14話 第2章 国内線飛行機殺人事件前編（後書き）

こんにちは、たくみ226です。

テスト週間が始まったので、今月いっぱいまで、よっぽどのがない限り更新頻度が少なくなります。

第15話 第2章 国内線飛行機殺人事件後編

伊丹発羽田行き航空機 殺人のあったトイレ

平次は、関西国際空港から羽田空港への機内で殺人事件が発生し、偶然その航空機に乗り合わせていたので、捜査を開始していた。

機内の乗客に不安を与えないためと、容疑者および関係者を1箇所
で集めた事で『犯人は連続殺人を起こさないだろう』と判断したの
で、警察と航空会社は即捜査をするために、関西空港か近くの空港
に着陸することになったので、警察は現場保存を通達した。

しかし、大阪府警（大滝警部）と警視庁（目暮警部）は、平次が機
内にいることを知ると、すぐに平次に『捜査するなど』言ったが、
ココで平次は『はい、そうですか。ほんなら操作せえへんわ。』と
は言うわけがない。『それなら勝手に捜査させてもらうわ!』と言
ったので、しぶしぶ許可をし、捜査を認めた。

そのため、平次はフリーで捜査することができた。（もつとも、事
件解決後に、大滝警部は遠山刑事部長（和葉の父親）と服部本部長
（平次の父親）にこの事をこつてりと叱られ、平次も父親の平蔵に
に叱られたが。）

平次は、トイレ内に入って大まかな様子を確認した。

「ふーん、こんな感じか・・・。指紋とかの証拠は警視庁で調べん
とわからんなあ・・・あれ、これは・・・ダイニングメッセージ？」

そこには、使い古した第2世代の携帯電話と最新機種のパワーデバイス
の両方で

”6833999000333333#2223444333#00
0”という数字と記号があった。

平次は少しニヤツとしながら心の中で言った。

「こりゃあ、かなり単純なメッセージやけど、こんなに押せる暇があったんか？犯人に直接吐かせて自供を聞いてみいひんかったら分からんなあ・・・」

そう言うのと、平次は、関係者を集めた座席から東山警部補だけを呼んで、席から少し離れた給湯室で言った。

「東山警部補。まさか、あの人ってこんな事なかった？」

東山香澄は、それを聞いた瞬間に動揺した。しかし、平次はそのことを聞かなかった。平次はこのときに大体のことが分かっていたからだ。そして、東山香澄は少し間を置いて言った。

「・・・私はそんな事知らないけど、ちよつとダンナに聞いてみるわ。あなた、ちよつと来て。あの人って・・・やったん？」

旦那の大樹は顔を引きつりながら言った。

「ああ、何で知ってるん？お前どこでそんな事知ったんや！？それはオレと社長とあの人しか知らん事・・・何でや？」

平次葉にやつとし、確信を持った様子で、力強く言った。

「やつぱり・・・犯人はあの人か！！それに、それやったら、俺としても許されへん事や！！」

15分後・・・

平次「これかは犯人を言います。犯人は・・・林さん、あんたや！」

林は驚きながら言った。

「どうしてなんですか？」

平次は淡々とダイイングメッセージを説明し始めた。

「まずこのダイイングメッセージ。これは”6833999900033333#222344433#000”となっている。まず、この番号をメールを書くときの日本語にしてみるんや。ほら。」

香澄は自身の携帯電話で試してみた。

「・・・（携帯で漢字モードにする）はやし、れんぞくさつじん・・・・林さんは連続殺人犯!？」

平次は強く言った。

「ああ、こんな事打てるんは社長と西山大樹さんだけや。だって、林さんが連続殺人者って知ってるんはこの2人と犯人の林さんだけなんやろ!？」

大樹「はい、この話は社長が『もしも私が死んでいて、林がその場にいたら、林が犯人や。林がこの2週間で大阪・京都・神戸・奈良で15人の人を殺した無差別連続殺人者の犯人だからな。この事は俺が死んでから言え!』といってたんですから。それに、連続殺人の証拠は、お前が人を殺してるときにいつも着ている服に、血をつけておいたから、警察は分かるやよろって・・・」

林「あ、あ、あいつのPDAに打ってたやつは消したのに・・・」

平次「へええ。あんた、今犯行を自供したな!？」

林「何で!？」

平次「分らんか？あんだ、何で被害者が関空に行く途中の電気屋で買ったPDAを知ってるんや？それに、PDAはフェイク。本物は携帯にあるんや！！着信履歴見てみ！！」

林「・・・（被害者の携帯電話の着信履歴を見る）・・・ほんまに載ってる・・・あのフェイクのPDA今日買ったん？うそやろ！？」

平次「被害者の嫁さんに聞いたら、『今日関空に行く前にPDAを買ったし、レシートもあるから販売店に確認してもいいで。』って言いよったから、大阪府警に調べてもらたら、今日買ったことが分かったんやから。つまり、この暗号以外に使われた形跡がないサラピンのPDAをあんだが知ってるんはおかしいんやから、もう自供しいー！！」

林「・・・私がやりました。じつは、俺が8件目の連続殺人をしたとき、あいつに連れ去るところを見られたらしく、証拠写真を持ってきて『これをバラされとうなかつたら、借金を10倍にするからな！』って言われたから殺すのを決意したんや。」

平次「・・・やっぱあんだ連続殺人しでかしたんや。何でお前は殺人をしたか答えてくれんか？」

林は微笑しながら言った。

「日ごろの生活にむしゃくしゃしてて、何か行動したかったからや。」

平次は、そんな表情で言う林に、とどめになる一言を放った。

「そんな理由でつみもない一般市民を殺し、目撃者も殺した！！いくらその目撃者があんだを苦しめようと思ってもな、ひよっとし

たら本当は、中山さん、あんたが罪を自供して、警察に自首してほしかったから、そんな形で警察に言わずにあんたに自首させようと思ったんちゃうのかな!？」

林は立っていたが、崩れ落ち、涙を流していた。

「そんな・・・そんなああー………」

それから、犯人の林は、羽田空港に着いていた警視庁捜査1課の捜査員と目暮警部に逮捕されて、無事に事件は解決した。

飛行機内にいた男2人・・・

服部平次に気づかれないうちに尾行していた。

男A「あの服部平次、事件を解決させましたね。」

男B「ああ、まあ、ダイニングメッセージがあったから簡単に解けたんだろうな・・・」

A「とりあえず本部に連絡を・・・」

B「ああ、あの方に連絡しなければ・・・」

A「彼を味方にすれば、われわれは最強になれるじゃあ?」

B「さあ・・・どうかな。彼より優れた人間がわれわれの機関にも山ほどいるはずだ!! まあ、服部平次は彼らの見習いにはなるだろうが・・・」

A 「われわれは本部に行くんですか？」

B 「ああ、空港あの女が迎えに来てくれているようだ・・・」

第15話 第2章 国内線飛行機殺人事件後編（後書き）

こんばんは、たくみ226です。

テスト前期間中なのですが、気分転換で書いてみました。

今回から小説には関係ないですが、あとがきに少しニュースの感想なんかを3つ入れていきたいなと思います。

内容はどこだかのポータルサイトから見出しを少し引用して、その後に関心をちょこっと…というものです。

現在試験版でやっていますので、『ニュースが分かる』とか、『小説と全然違うから止める』等のご感想・ご批評等をどんどん受け付けています。

— — — — —

・日本アカデミー賞で今回から新設された最優秀アニメーション作品賞に「時をかける少女」が選ばれたようです。コナンがこの賞を取れなかったのが残念。

— — — — —

・無断持ち込みをしたPCから資料が流出し、陸自2隊員を懲戒処分・・・当然ですね。

彼らは日本の国を守る者として、日本国民だけでなく、装備の情報などの防衛機密情報も守ってもらいたいものです。しかもウィニーで流出したようですし。

— — — — —

・政府は女性を助けようとして電車でひかれ死亡した宮本邦彦警部（2階級特進）に対し、旭日双光章を贈ることを決めたようです。本当にこのお巡りさんは『警察官の鏡』だなと思いました。

しかし、安部首相が報道陣に宮本警部の名前を間違えて言っていたのが首相として問題だと思いました。

— — — — —

第16話 第2章 警視庁東都センタービル突入事案

3日目 午前9時

警視庁 会議室内

目暮警部中心である会議が始まっていた。

目暮は、松本管理官と、警視庁警備部長と、同じく警備課長、さらに数人の警察”官僚”がいる中、松本管理官が警備部の管理官とともに指揮にあたり、突入命令を出すという。

目暮はブリーフィングをしていた。

「では、公安部からの情報によると、本拠地は、東都市にある東都センタービル15階にあるブラックサンダー石油に存在している。・・・」

この話をよそに・・・

高木は千葉とひそひそ話をしていた。

「それにしても、秘密主義でかつ非公開の公安が、よくうちに情報提供しましたよねえ。」

千葉も相槌をうちながら言った。

「そうですね。そういえば、神奈川県警から横浜港で銃撃戦が起こったとかで、応援要請があったようですねえ。」

高木「それって、あのFBIと黒の組織のやつでしたよね。」

千葉「何か、海上保安庁まで巻き込んでるらしいですが・・・」

高木「これで自衛隊が出たら困りますけどね・・・」

この高木刑事の願いたくないことは願ってしまう・・・

目暮は、2人の言っていることにはつゆ知らず、ブリーフィングを進めていた。

「では、今日の14時30分に突入する。犯人は10人前後とされているが、FBIの元米軍部隊で死傷者がでていると言う位の強さに、RPG所持の重武装だ。念のために、演習目的・支援協力として、上は極秘に自衛隊を出動するといった。ただし、あくまでも警察が主導だ！！刑事課捜査一課からの突入部隊は、難波君、田中君、上原君、小松原君、福原君、田井君、高木君、千葉君だ。突入班のことを説明する。

まず、人質解放用の特殊部隊SATが1・2班を、暴力団関係に優れた暴力団対策課が3班を、公安部は4班に、機動隊の銃器対策部隊が5・6班に、刑事課強行班系の班は7班になり、現場指揮官はSATの古川警視正だ。」

古川「分かりました。では目暮さん、犯人を発見次第即射殺で良いですよね？」

目暮「私は逮捕第一にしたいが・・・上がこの前の突入で木下くんが死亡したことを受けて射殺第一の方針になった。個人としては悔しいが許可する・・・」

古川は、当然だという表情をしていた。

それもそうだ、SATが突入するというのに射殺禁止というのは銃

器の使用が出来なくなる

のと同じだからだ。それでは警察官はしに行っている様なものだ。

14時30分 東都市、東都センタービル15階ブラックサンダー
石油前

警察で無線による交信が行われた。

――無線交信――

難波「こちら6班。古川さん、どうぞ。」

古川「こちら古川。難波君か・・・こうやって無線で言うのはSAT以来だね。」

難波「1班（SAT部隊）が、スタングレネード投てき。これより突入する。」

古川「人質救出を最優先だ。間違っても人質を殺すなよ!!」

難波「了解!」

そういうと、難波は高木たち捜査一課の人間に言った。

「分かったな。高木、千葉は、人質発見次第ここから出して保護。

田中、上原は援護だ!!」

高木、千葉、田中、上原「分かりました。」

難波「後の者は犯人射殺だ!!」

全員「分かりました。」

難波「拳銃を射撃用意に!!」

全員「はい!!」

難波は、元SATだからか、SATが標準装備している機関拳銃で、

サブマシンガン

世界的に一流の特殊部隊しか持つ事が許されないと言うMP―5サブマシンガン使用の許可を現場で特別に許可された。他の捜査1課刑事は、前回の少年探偵団のときと同じ拳銃を使用していた。

しかし、今回は盾を持っているのは高木・千葉・上原だった。

古川「突入用意………突入!!」

こうして警察は、蘭救出と組織壊滅のために入った。

突入班は6班。約50人ほどの警察官が配置。表面上のドアは15階だが、中で従業員専用のところがあるために、10階から最上階の18階まで持っているのが外からの入り口は1つでこれくらいの人数は必要なのだという。

無線には、こういう交信があった。

————無線交信————

SAT隊員高洲「こちら高洲、古川さん、相手は黒い服装をしてるんですよねえ？」

古川「そうだ。暇があれば逮捕しても良いが、そんなもたもたしているよなことをすればお前が殺される!殺せ!」

高洲「了解!!」

SAT隊員杉上「こちら杉上、犯人発見。射殺しました。」

古川「了解、引き続き犯人に注意せよ!!」

高木「こちら高木。蘭さん、いえ、人質発見」

古川「人質発見、SAT、捜1、両方の救出係、直ちに救出を!!」

「6班捜一、千葉、了解!」

「1班SAT、山口、了解!!」

「こちら千葉、人質発見。これから保護する。直ちに援護を。」

田中「千葉、現在向かって・・・『パシュン!』・・・」

上原は慌てて無線を付けて本部に連絡した。

「こちら上原。田中さん、撃たれました!救助を!!」

古川「場所はどこだ?」

上原「15階、営業3課と書かれたプレートの真下です。」

古川「了解。救助と援護の吉村班を向かわせる。それまで上原、お前が持ちこたえろ!!」

上原「了解!」

その頃、難波は捜査一課の人間と蘭のいるところへ向かっていた。
「こちら難波。千葉、人質の状況は?」

千葉「特に目立った外傷はなし。難波さん、援護班がやられました！！そこから別の救出班の用意を！！」

難波「では、私と、田井が援護する。場所は？」

千葉「現在社内食堂横の女子トイレにいます！！」

難波「了解。すぐ向かう。」

「こちら4班班長の高井だ。隣のビルから狙撃班配置完了！！」

古川「了解。敵味方の識別をちゃんとしろ！！」

高井「わかりました。」

その後すぐに、悲鳴のような声がした。

「こ、ちら3班、敵に包囲された。18階エレベーター前。手りゅう弾使用に許可を！！」

古川は慎重に言った。命令を間違えると、責任問題になる前に、人が死ぬのだから・・・。

「3班。今から犯人を狙撃する。それまで待て！！」

「4班。18階エレベーター（EV）を狙撃しろ！隊員が包囲されている！」

無線でコレを聞いた狙撃班は古川に許可を仰いだ。

「こちら狙撃班高井。隊長。ライフルで18階エレベーター前の敵の射殺の許可を。」

古川は3秒考えてから言った。

「こちら古川。射殺許可。30秒後だ。」

高井「分かりました。市川、狙撃準備を！！」
市川「わ、分かりました。」

彼が少し驚くのも当然だ。今まで人形を撃つことはしていても、生身の人間を撃った事はないからだ。

30秒の間に古川は包囲されている隊員にこの事を伝え、準備を整えていた。

市川「30秒経過・・・射撃します。」

古川「狙撃班・・・撃てえー！！」

『パシユ・・・パシユ・・・』

組織の構成員たちに包囲されていた突入隊員はかなりの人数で包囲されていたのに、一瞬で包囲が解かれた。

そのころ 社内食堂前女子トイレ

難波「高木！人質は？」

高木「はい、ここです。」

難波「こちら難波、人質の女性。生存確認！」

古川「出口まで援護を！！」

難波「これより6班は人質保護のため退却!!」

古川「了解!直ちに開始!!」

「こちら上原。応援は?」

古川「命令だ!田中を見捨てろ!!応援班は現在お前らの位置から約23メートル先にいる。お前の現在位置からだ、15階E Vに行け!!そこまで行け!!そうすれば、お前は助けられる!!救出班は田中を救出する!!もう一度言うが、これは命令だ!!」

上原「たとえば、命令でも・・・仲間は見捨てることはできません!!」

古川「じゃあ、お前は死にたいのか!!」

「SATでさえ、簡単に突破できないところにいるんだぞ!!この意味は分かるか!!」

「お前んところは7発マガジンの拳銃しか持ってんなかったんじやなかったのか?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「こちら上原。応援来ました。今から退却します!!」

古川「了解!!よかったなあ、奇跡だ。いや、部下のおかげだ!!直ちに戻れ!!」

「こちら高木。田井さんが出口から15メートル地点で撃たれました。」

古川「入り口から助けが来る。彼は置いていけ！これは命令だ・・・」

高木「分かりました・・・・・・・・・・」

「こちら高木。脱出完了！！保護を！！」

古川「目暮。保護だ！！」

目暮「分かりました。・・・・・・・・15時24分、保護しました。」

高木「さあ、蘭さん。大丈夫ですよ。今から病院に向かいますから。」

「こちら高洲、犯人は東都街道に降下！！一般人に当たる可能性があるため攻撃不能！！」

古川「4班は？」

高井「この状態では、私の部下や私でも無理です！！」

こう言ったのは、高井はオリンピックの射撃で、金メダルを2回取ったことのあるとても優秀な選手だったからだ。

古川は焦っていた。これほどのテロリストを野放しにすると、新たな事件が起こるからだ。

「下の自衛隊に応戦許可を！」

その瞬間、古川の方にあった黒電話が勢いよく鳴り出した。

そして古川は無線を付けながら言った。

古川「何だ。今忙しいんだ。」

その瞬間、貫禄のある5・60代くらいの男性の声が出た。

白馬警視總監「私は警視總監だ。現在のこちらの状況は応戦不可と判断する。道路上の犯人からの攻撃がない現状では無理だ。正当防衛であるという明確な証拠はない。よって、銃器での攻撃を禁じる。いくら銃刀法などで逮捕する事はできても、彼らが警察官を殺したと言う断定できる決定的な証拠は何もない！ここにいる防衛庁長官や、関係閣僚、首相は全員反対している。」

そう、これは桜田門の警視庁でも、霞ヶ関の警察庁でも、国家公安委員会からでもなく、永田町の首相官邸からかかってきた電話だった。

古川は興奮している状況だったので、電話の相手が警視總監でも怒鳴っていた。

「こっちはすでに5人犯人から撃たれてるんだ！！自衛隊との現場共同司令部と自衛隊現場司令官は、このケースだと軍事的に攻撃可能といっている！！現場は許可を出しているんだ。それで応戦許可は良いんじゃないのか！！」

すると、白馬警視總監は落ち着いた声で言った。

「自衛隊と警察は別の指揮系統だ！それは絶対に覚えとけ！古川君。それに、自衛隊は軍隊ではないんだ！！治安出動は出せる状況でないし、今から出せても問題が・・・君もそれくらいは警察学校とかで習ったろう？」

古川はため息交じりの声で言った。

「…分かりました・・・」

「こちら高洲。降下中の構成員の中に主犯格の男らしき人物が混じっている！それでも射撃はだめですか？」

古川「一般人に危害が及ぶ可能性がある。それに、警視總監は射撃禁止だと言っている。」

高洲「了解・・・」

警察はこの事件の関係で非番の警察官を含めて全警察官の5割を使い、周辺1キロの円で進入禁止を設定している途中で、現場付近には向かいの建物で報道カメラや、逃げ切れなかった一般人の警護をしている制服を着ている一般警察官以外の警備をしている警察官がほとんど居らず、地上には後方支援と警備の陸上自衛官しかいなかった。

このとき、陸上自衛官は89式5.56mm小銃や64式7.62mm小銃を所持していたが、現場の自衛官が『撃て！！』と言う前に、『正当防衛、緊急避難以外の武器の使用を禁ずる。』と第一師

団（首都を防衛する陸上部隊）の司令官が言ったため、組織構成員が発射したときだけ射撃した。しかしながら、奇跡的に、組織構成員が走りながら適当に撃っていた為、自衛隊側に死傷者は全く出なかった。

撃たれた田中刑事と田井刑事は、すぐに東都大学付属病院に運ばれたが、2人とも死亡した。

警察はこのビルからSATを退却させた・・・
・・・

一方・・・黒の組織の幹部は無傷だった。

死者・・・警察・・・2人。黒の組織構成員・・・21人（うち6人は、拘束後自殺）

負傷者・・・警察・・・6人。黒の組織構成員・・・0人

第16話 第2章 警視庁東都センタービル突入事案（後書き）

こんばんは、たくみ226です。

今回の『警視庁東都センタービル突入事案』

後半は完全にお役職ティストになっています。

こういうのは実際にありえそうな気がします。

『警察官』は自分の身と市民の安全を守るために犯人を撃ちたい。
でも『警察機構』や『政治』はもしもの誤射のために撃たせたくない……。

海上や航空ではありえない、陸上だからこそその問題点なんです。

政治は、『メディア』におびえてるんです。

もしもの誤射によって民間人が死んでしまったら……。

本当の正解は民間人を撃ってしまっても犯人射殺なのか、それとも射殺しないのか？

それは警察がその行いをした後、国民が決めることなのです。

自分の身を守るために誰かが犠牲になってくれるのがいいのか、他人の身を守るために自分が犠牲になるのがいいか。これ以外の答えは認めないこの2つの選択肢でこの状況下で国民・市民は動かなければいけません。

予告なのですが、近いうちのあのコナンノベルズで有名な作者さまのランクインされている作品の『公式』スピノフをさせて頂ける事になりました！！（もちろん『公式』と言うほどですので、その先生に許可を取っています。）

投稿開始時期…3月中

後は未定です。

これからよろしく願います。

第17話 第2章 東都百貨店での戦い コナン正体編

ブラックサンダー石油（黒の組織日本支部）から逃げ込んできたジンたちは、小銃や、RPG、機関銃等の装備で東都百貨店に入り、そして彼らは立てこもった。

地下4階・警備室

16時30分

ジン「今すぐシャッターを閉めろ！！さもないとこいつの様にするぞ！！」

そこには、1人の男の死体があった。そう、ジンが1人の警備員を射殺したのだ。

係員はおびえた様子で声が出ない状況だったが、振り絞って言った。「分かりました……。そうします。」

同じころ、各階では……

構成員「騒ぐな。ここに集まれ！さもないとこの銃で殺すぞ！！」

『パン！……ババン……』

なんと、黒の組織の構成員達が、百貨店を占拠し始めたのだ。

構成員「全員伏せろ！」

『ダダダダダダ・・・』

そう、構成員が持っているカラシニコフAK47小銃から実弾が発射された。

客・店員「キャアーーーーッ！」

客A「くそっ、何や、あの人数は！？むっちゃ多いやん！」

黒の組織の構成員が百貨店を占拠し始めてから5分と経たないうちに警察が警察車両の車載式スピーカー越しから組織の構成員に降伏するように話していた。

そして、それと同じくして、警察車両と随行していた自衛隊車両が続々やってきて、TR東都駅付近を占拠し始め、駅付近にいる人は鉄道や自衛隊のトラックで強制的に運んだ。

これは民間人の安全のために師団司令官から独断で出された命令だった。

スピーカー「警察だ！組織の諸君、直ちに降伏しなさい！！！」

構成員「その女動くな！！！」

『ダダン・・・』

構成員の1人が、その女性店員を射殺した。

客&店員「キャアーーーーッ！！！」

程なくして客の1人が抵抗しようとした。

客の1人「お前等なんかに占拠されてたまるか！」

客の1人は構成員に抵抗し、構成員の銃を奪おうとしたが・・・

『ダダン・・・ダダダダダダ・・・』

『バタツ・・・』

客&店員「キャアーッ！！」

そう、抵抗した客は、別の構成員によって射殺されたのだ。

構成員A「わかってるんか？このまま大人しくしてへんかったら、この男のように頭に風穴開くで！！」

構成員B「そうだ！大人しくしとけ！！」

銃口を上に向けたカラシニコフAK47小銃で威嚇目的で発砲をした。

このように買い物を1箇所にとめて、妙な動きがあれば、即射殺ができるようにした。

30分で、各階に構成員を用意させ、この百貨店を制圧した。

19時25分 東都百貨店職員用入り口前。

コナンはこの知らせを聞き、現場に向かおうとしたが、途中で警察

の検問や通行止め等の交通規制で現場まで迎えなかった。しかし、ある検問で千葉刑事に会い、彼の協力によって現場まで入ることに成功した。

千葉「じゃあ、工藤くん、哀ちゃんがココから入って、中を見てきてください。中の状況がわかれば警察こっちで対応します。」

コナン・哀「わかりました。」

2人は排気口から、中に入っていた。

排気口はトイレの天井につながっていて、その天井からトイレに出た。

そして、彼らがトイレから出るとそこには・・・

少年「おお。コナンじゃねえか？」

コナンに話しかける少年たちがいた。コナンがその声で振り向いた。

コナン「おまえは元太。それに光彦や歩美ちゃんまで・・・何でここに？」

元太「おれたち・・・」

光彦「元太君。それは言わないって言ったじゃないですか？」

元太が言いそうになっていることを光彦が止めた。

元太「おお。ごめん、ごめん。ところでコナン、何が起きたんだよ？外から警察っぽい人間がいるし、なんか緑色のトラックやジープもいるぞ？」

コナンは、そういう事は分かっていた。コナンは彼らを避難させる為にこういった。

コナン「そんな事より、あの換気口からお前らはさっさと逃げろ！」

すると光彦は、コナンがそう言ってからすぐに言った。

「そんな事はできません！！コナン君、これは立てこもりって言ってますよね？でも何で立てこもりなのに警察じゃなくて陸上自衛隊の軽装甲車や無反動砲、高機動車にトラックがあるんですか？」

男が、少年探偵団の話に割り込んできた。

「ああ。これは立てこもりや！！しかもむっちゃ凶悪やと見るで！！！」

コナンはそれを言った人間を驚かずにいらなかった。

コナン「お前は・・・服部！！何でここに？」

そう、服部平次がいたのだ。

平次「おお、工藤。なぐんや。お前もここにいるんや？」

平次の横にいた和葉は、コナンのことを工藤と呼ぶ平次を不審な目で見ていた。

「何でいっつもコナン君のこと工藤、工藤って言うん？」

コナン「って言うゝか、何で大阪から東京まで来たんだよ？」

平次「お前人に呼ばせといて何ちゅう言い草や。ひどいやっちゃんの」。

そう言うと、平次は飛行機に乗ってからのことを話し出した。

平次「それでその後、買い物したんや。なぐんか和葉が急に東京に

ある何とかって言う・・・」

すると、和葉はタイミングよく入ってきた。

「フサエブランドのショップや！！それくらい覚えとけ！！平次！」

平時は思い出した様子をしてからコナンに言った。

「だから工藤。そういうこっちゃ。」

和葉「そやけど平次。何でいつもコナン君のこと、工藤、工藤って言うん？蘭ちゃんのダンナの工藤くんやあらへんのに？」

平次「そりゃあ・・・とにかくあのボーズ（コナン）が何となく、工藤に似てるんやから・・・」

ココで和葉はとんでもないことを言った。

和葉「似てて当然や！！コナン君は工藤くんなんやからなあ！！」

平次は突発的なことで驚いていた。

「何で和葉がそんな事言うん？」

コナンもそうだった。今回は蘭のような事前に疑っているような素振りを彼女はする事はなく、いきなりコナンに正体の事を言ったからだ。しかし、コナンは冷静に対応しようとした。

「そうだよ。僕はコナンで新一兄ちゃんなわけ・・・」

すると、和葉は待ってましたかのような表情をし、コナン、平次を怒鳴りつけた。

「証拠はあるわ!! まずはこれ。蘭ちゃんから前に貸してもらった写真。この工藤くんと、今のコナン君。顔がぴったりや。」

こんな単純なことなんやよ平次はあきれていた。

「それだけか？和葉？そんだけやったら他にも・・・」

しかし、和葉には完全に江戸川コナンⅡ工藤新一と言う自信があったので、まだ強気で言っていた。

「まだあるわ。次はこれや。工藤君が蘭ちゃんにあげた言うこの人形の中身。この人形の箱にあった指紋と、コナン君がくれた言うこのプレゼントの包装紙にあった指紋。ほら。一致してるやろ？コナン君のプレゼントに工藤君が触るわけないし、第一、そうやったらコナン君は工藤君と会ってたのに蘭ちゃんにひ言ってる事になるんやろ？」

平次は『指紋』をどこで鑑定したのかが気になっていた。コナンも同じだ。民間人がそう簡単に指紋の照合なんてできるわけがないからだ。

平次「どこでこんなん？」

コナン「そうだよ。どこでそんな指紋の照合なんてしたの？」

和葉は止めを刺すかのような勢いで言った。

「お父ちゃんに頼みこんで、ちよつと機械、貸してもらってん。」

平次「なにお前、勝手に警察の機械を・・・」

和葉「もちろん、平次ん所のおっちゃんにも許可もらうけどな！それに、最後にこの音声や!!」

ⅡⅡカセットテープⅡⅡ

平次「・・・工藤お前あのへボ探偵ところの姉えちゃんにまだ正体ばれてへんのかあ!？」

コナン「うっせえなあ・・・ばれる訳ねえじゃねえか・・・蘭に正体ばれたら、蘭だってあいつらに消される対象になるんじゃないやねえか! 誰がばらすか!!」

平次「そやな工藤。お前ら幼馴染の夫婦やもんな？」

コナン「バーロ!! そんなんじゃないやねえよ!」

|||||

和葉は、このテープの存在があって自信を持っていたのだ。
「これでコナン君が工藤君やることが分かったやろ!？それにコナン君、いや工藤君は組織言うたりあの毛利のおっちゃんに対してへボ探偵言うたりしてるってことは、あの眠りの小五郎にはなんかからくりがあるんじゃないやん？」

平次（小声）「どうする、工藤？ほんまの事言う？」

コナン「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

コナン・平次と和葉には深い沈黙が流れた。

その後・・・

コナン「その話はこの立てこもり犯を警察に引き渡してからだ・・・後で言う。」

和葉は、この瞬間涙ぐんで、いや、泣きながらコナンに怒鳴った。和葉「何や工藤君！あんた蘭ちゃんのこと何も思ってたへんのちゃうか！？どうなん？蘭ちゃんは今まで工藤君がおらんくて、どんだけ悲しかったか分かるか？少なくとも、あたしが蘭ちゃんと友達になっってから、事あるごとに、工藤君のことを相談してきとったんや。『工藤君、今どこにいるんやろう？』とか、『工藤君生きてるんかな？』とか、『私、工藤君のことが好き！！でも・・・』とかって、蘭ちゃんがどんだけ苦しんでたか分かる？ここまで蘭ちゃんに隠し通してたんやから工藤君には女心が分かるわけ・・・」

コナンも怒鳴るように、涙を流しながら言った。

「分かってるよ！！蘭の気持ちは！！！！少なくとも、蘭のことを、オレは…オレは…「好き」だ！それが分かって、いや、そうだからこそ、蘭に正体を明かさなかったんだ。」

『パシーン！！』

コナンの頬に和葉が平手で叩いた。

平次は和葉を抑えた。そして小声でばやいていた。

「く、工藤・・・それもそうやな・・・。」

そして、平次は、和葉に新一のことを理解してもらおうとした。この状態では、どう考えてもコナンⅡ新一であることを隠すことは出来ない判断したからだ。

「和葉、俺らの話を聞いてくれ。もしどうして工藤がこのようになったんかを知りたいんやったら教えたる。その代わり、お前に命の

危険があるんやけど……。どうや？」

和葉は、少しにニヤツとした。

「命の危険……。何それ！？ ハハーン、さてはあたしに工藤君の正体を教えんってことやな！」

平次は和葉にゆっくり言った。

「ちゃうわ……。オレはお前を死なせるようなことはさせとうないし、させんつもりでおる。でもな、コレだけは言うておきたい。工藤とあの姉ちゃんのために『命を懸けて戦うつもりがない』と思うんなら、そう思うんなら……。江戸川コナンⅡ工藤新一（コナン）には今後一切、誰にも聞くな！！そして、誰にも言うな！！！もちろん、あの姉ちゃんにもや。言ったら、お前が姉ちゃん殺したのも同然になるで！！！！！」

和葉は、口を開いた。

「そう、なら、その正体……。『聞かせて』貰うわ。少なくとも、蘭ちゃんと『友達』なんやから、友達の助けにならなあかんやろ？それに、何があったんか知らんけど、平次はそれに『命かけて』してるって事なんやから、お姉さん役してるアタシも知っとくべきやろ？」

この言葉を聴いて、コナンは静かに口を開いた……。

コナン「分かった。和葉ちゃん。ありがとう……。これから本当のことを話すよ。これから先、和葉ちゃんには全く分からないような事が出てきても、『疑問』を持たないで欲しい。それは俺にも答えられねえ事だし、ここににいる人には分からない事だろうから……。」

そういうと、コナンは自分の正体や、体が縮んだこと、さらには、その蘭が何者かに拉致された事を話した。

第18話 第2章 東都百貨店での戦い 準備編

そのとき、女性が光彦に対して声をかけてきた。

女「あらあら・・・何で江戸川君達少年探偵団が・・・」

光彦は、その人のほうを向いて言った。

「あっ先生。」

そう、声をかけたのは、あの1－B担任の小林先生だった。

そして、それを見た男女のカップルに見える人が現れた。

そして、そのカップルのうち、男の方が言った。

「あれ？あなたは・・・コナン君の担任の先生じゃないですか？それにコナン君や服部君まで・・・」

その男が向いている方向を見た女も言った。

「本当ね。なんでコナン君たちがここに！？」

そう、この男と女は、高木刑事と佐藤刑事だった。

ついでに、佐藤&高木刑事については、千葉刑事および警視庁からコナンたちが中に入ったことは知らされていなかった。

コナンは心底驚いた。犯人が嚴重に警戒している中、警察官がいるからだ。

「何で2人がココに・・・この立てこもりのなかどうやって？」

そのことよりも、少年探偵団たちは、高木と佐藤が2人っきりでいることの方が関心が高かった。

歩美「それって職務中にデートしてたんですか？」

光彦は少し考えて、頭の隅にあったものを引っ張り出した。

「それって、確か・・・服務規程違反とかなんとかって言うやつちゃいけない事なんじゃなかったでしたよね？」

高木は、少年探偵団達に誤解を与えないように理由を言った。

「それは、あの組織の日本支部突入後この辺りに組織の構成員が逃げ込んだと通報があったから、さっきココに来た佐藤さんと、デートのふりをしてみて警戒していたんだけど、2、30人以上の構成員と幹部らしき人が、小銃や、対戦車ミサイルなどを所持していたんで、何もできなっただんだ！」

佐藤「この百貨店の中では後、由美と白鳥君たち、何人かがいたみたいだけど、あの装備じゃもう建物内から、誰も抵抗できないわ！」

そのとき・・・

女「あら、メガネのがきんちよ！！！」

コナン「あつ、園子ねーちゃん！それに、瑛祐にいちゃん！！！」

そうしてコナン・哀・少年探偵団・平次・和葉・高木・佐藤・園子・本堂が、この建物内から、ジン・ウォッカ・あの人といわれるボスを探しに行くこととなった。

各階の人員配置は以下の通りになった。

10階	遊技場	FBI	VS	構
成員				
9階	ホール	//		
//				
8階	紳士服	//		
//				
7階	おもちゃ関係	//		
//				
6階	特別展示場	//		
//				
5階	本屋	//		
//				
4階	映画館	//		
//				
3階	TR東都駅 大阪府警SAT&大滝警部ほか			
//&ウオツカ				
2階	TR東都駅ホーム	//		
//				
1階	化粧品売り場	//		
//				
地下1階	食料品売り場 警視庁SAT			
//				
地下2階	駐車場	//		
//				
地下3階		//	佐藤・高木・白鳥・由美	
//				
地下4階	警備室	//	コナン&哀&SATVSジン・	
工作員・親衛隊・構成員				

店外・・・S I T・自衛隊第1師団第1普通科連隊第1, 3中隊・
付近の所轄警察官
S I T・・・警視庁の人質立てこもり対処部隊

第19話 第2章 東都百貨店での戦い 政府の決心編

16時15分

東京 永田町 首相官邸

ここには、首相官邸の主である内閣総理大臣をはじめ、総務大臣・外務大臣・防衛大臣・財務大臣・経済産業大臣・国土交通大臣・内閣官房長官・国家公安委員会委員長のほかに、警視総監代理や、東京都関係者・米花市・東都市関係者が集まる非常に大きな会議になった。しかし、この会議は非公式なものとなれ、マスコミ関係者に分からないようにしていた。

ここに警視総監代理がいるわけ・・・本来はこのような場においては、『代理』ではなく、警視総監自らが行くべきである。しかし、その白馬警視総監は、警察が日本支部破壊を実行したとき、SATの街中での狙撃・攻撃を禁じ、自衛隊の戦闘反対を言った白馬警視総監。彼はあれから、自宅にいたときに何者かに狙撃されて重体となっている。そのため、警視総監は、副総監の吉村が臨時に務めた。

吉村「警察庁長官と総理・防衛大臣と会議したい。」

吉村は、事態の深刻さを重く受け止めていた。

彼は白馬警視総監とは一線を画した人間で、警察官の増大・SAT部隊の拡大。さらには、警察出身の首相になって、日本版FBIの設立などを唱えている人間だった。

非公式安全保障会議の中で、首相に向けて吉村は強く自衛隊出動を迫るためにこう言った。

「この現在の百貨店の膠着状態では、突入の際にいくら警察官を増やしても、質に大きな差があります。これをご覧ください。これは、東都市にテロリストが現れたときのマニュアルです。」

そういうと、プレゼンターの警察官は、パワーポイントを操作し始め、スクリーン上に映し出した。

「こちらは、極秘に作られたテロリストとの戦闘予想です。この予想では、警察力（S A T・機動隊系隊員）で阻止可能なのは、小銃程度の戦闘員で約40～50人といったところです。今回襲撃した武装集団の装備は、小銃・機関銃・一部では対戦車ロケットで、公安によると人数は約50人から80人。現在の警察力では阻止不能の可能性があります。」

吉村「機動隊全班出勤までに突入しなければならない事情があり、過去2回やむなく捜査一課の捜査員を投入しました。結果、合計で3人殉職しました。しかし、相手は全部で30人程度で半分以上は逃走しました。このほかにアメリカのF B Iが横浜の倉庫に突入。元米軍兵士部隊で1人死亡。4人負傷と言う結果です。また、巻き添えで、民間人も複数人死亡しています。」

プレゼンターの警察官「計算上では、機動隊で対応できない人員を、警察だけでまかなうとすれば、制服警官・刑事は少なくとも数十人は殉職します。また、射撃の腕の悪い一般警官が入るこの密閉された中では民間人は少なくとも30人以上の死者が出ると予想します。しかし、S A T・機動隊と同じ位の射撃の質・または、それ以上の技術を持っている陸上自衛官が作戦に参加すると民間人は30人程度の死者で済むと予測しています。」

首相ら政治家はこの予測に驚いていた。そして、首相が吉村に尋ねた。

「では吉村君。この人数の差は？」

警察庁長官である諸星は、警察庁の知らないところで主ミレージョンをしていたことに不満を持っていた。

「吉村君。どこでこんな予測を立てたんだ!？」

吉村は淡々と言った。

「まず、長官の答えは答えかねます。続いて、首相の質問への答えは、戦闘の早期解決による死者の減少、または、一般警察官の誤射件数の減少によるものです。」

防衛大臣はこの報告に関心を持ち、横にいる事務じかんと話をしはじめてから言った。

「首相。あなたか警察庁長官の許可が得れば、私は陸上幕僚長に連絡して現場近くを警戒区域とし、半径2キロ圏内は避難命令。東京都・米花両市に通行規制をする!！」

警察庁長官は、その防衛大臣の態度に不満を持ち、彼を怒鳴りつけた。

「そこまでは必要ありません。たかが武装した一般人ですから。警察^ちで他道府県のSATの支援を仰げば十分です!! 実戦をした事ない防衛省・自衛隊の協力を仰がなくても十分ですよ!!」

男「たかが武装集団・・・ですか。なら、この書類を見てもですか!？」

首相が、吉村の隣にいたが帰国人男性を指差して言った。

「この方は? さっきから気になっていたんだが・・・。」

すると、吉村がそれに答えた。

「この人はFBI捜査官のジェームス・ブラック氏です。」

ジェームスは、流暢な日本語で話し始めた。

「初めまして、日本の警察庁長官、ならびに閣僚の皆さん。この組織の事を侮ってはいけません。まず、先ほどお渡しした資料をご覧ください。」

首相・警察・防衛庁長官「なんと言うことだ!!」

その資料には、黒の組織のアメリカでの活動と、分かっている装備や資金団体のリストがあった。

警察庁長官は驚きを隠せないでいた。

「こんな組織と我々は立ち向かっていたのか? しかも、うちや警視庁はまったく存在自体を知らずにいたのか!!」

小田切警視長がさらに長官の驚きように追い討ちをかけた。

「うちの捜査一課の目暮の報告では、過去の事件等を洗い出した結果、過去数回にわたって日本に来日し、2人の殺害を指示し、杯戸シティーホテルの旧館を全焼たと言う報告が・・・」

首相は、これをテロと断定するほかになく、自衛隊を行動させ、任務を与えようと決心した。

「自衛隊に治安出動準備・警護出動命令を実施する。近辺の陸上自衛隊に命令を。また、海上警備行動発動が発令できるように警戒を実施! さらに、国土交通大臣には、海上保安庁に第三管区海上保安部に出動命令を!!」

こうして、日本政府は黒の組織を駆逐しようとした・・・。

第20話 第2章 東都百貨店での戦い 大阪SATの戦い編

19時40分

東都百貨店 3階 TR東都駅

この百貨店は店内に駅があるという建物のため、3階の全てのフロアが駅施設となっている。

和葉は平次と、3階の駅改札口前にいた。そのとき、ホームで彼らは知っている人間がいたので驚いた。

「大滝さん。それにお父ちゃん。何でここに？」

平次も驚いた。東京に大滝と和葉の父親の遠山刑事部長がいるからだ。

「何で大滝ハンと和葉の親父が？」

大滝が答えた。

「コナン君らに会ったときに顔見知りやからいいんちゃうかつちゅう本部長の命令で。ほんなら、毛利さんとこの娘さんを探そか？」

なぜ大阪のSATが管轄外の東京で活動できるか・・・それは、警視庁が大阪府警に支援要請を出し、本部長の服部平蔵が渋々許可したからだ。

|| || || ||

この状況を組織の構成員は見ていた。そして、現場監督であり、上司であるウォッカの指示を携帯電話で仰いだ。

構成員班長「ウォッカさん。警察と大阪の探偵、服部平次が来ました。相手の数が多すぎます。支援を!!」

ウォッカは携帯で答えた。

「お前らだけでがんばれよ!!」

そう、ウォッカは下の階に1人だけ逃げた。

この状況は、まるで、北のほうにある拉致国家のスローガンの”一当百”という1人で100人倒すという無茶なスローガンと同じだった。

なぜなら大阪府警40人に対し、組織構成員は10人だからだ。まさに他勢に無勢だ。

構成員班長はこんな勝負の決まっている戦いをするつもりはさらさら無かったので、投降しようと考えていた。

「上は何にも支援をしないみたいだ!これならサツに投降しようぜ!ここにいるやつは、寝具売り場からパクったシャツで白旗作りだ!!」

こうして組織構成員4人は、投降の準備を始めた。

遠山刑事部長は、同期の警備部長を引き連れていた。そして、遠山が偵察していた組織構成員を発見した。

「犯人居るで!!はよ行動開始せんかい!」

そう指示がきたため、SAT班長は無線で言った。

「行動開始!!撃て!!」

構成員班長の指示が聞こえなかった構成員は、SATにやられていく・・・

『パン、パン…』

『ダダダダッダ・・・』

銃声が徐々に大きくなって響いてくる・・・

すると・・・

前方で偵察していたSAT隊員は後ろから攻撃してくる隊員と、それを指揮している班長に言った。

「班長、待ってください。」

班長は不思議に思いながら、SAT隊員に攻撃停止を言ってから聞いた。

「何や？」

隊員は班長に分かるように、偵察用カメラで前方を撮影した。偵察用カメラはオンラインで映像を見ることが出来るので、班長はそれを見た。

「あそこに白旗が・・・」

そこには、バリケードがあったが、その上には白旗があった。

遠山刑事部長は隊員に言った。

「拡声器を・・・」

隊員は拡声器を手渡した。

「ハイ。」

遠山刑事部長破格世紀のスイッチをオンにして、フルボリュームで言った。

「そこにいる白旗のバリケードの中にいるやつ！はよ武器をこっちに全部渡して両手を挙げて出んかい！！」

すると、構成員の「全員いわれた通りにしろ！！」と言う声が小さいながらも聞こえた。

そして、構成員は一気に武器をSAT隊員に手渡し、降参した。

警備課の課長が言った。

「とりあえず、こいつらは銃刀法違反で現行犯逮捕や。武器は全部没収や。さあ、お前ら、こっちに来んかい！！」

こうして3階は制圧した。

第21話 第2章 東都百貨店での戦い 報道と決戦準備編

地下1階 食料品売り場

テレビの夕方のニュースの後の番組が、突然変更され、特番になっていた。

日売テレビでは、アナウンサーはこんな事を言っていた。

アナウンサー「つい先程、私は、別番組の取材をしていました。4時半ごろ、突然、銃を持った人間が入り込み、この杯戸百貨店を占拠しました。さらに、その銃を持って立てこもった男は、上に向けてこの銃が本物だと思わせるためなのでしょう。銃弾を発射させました。その後、男性が犯人に抵抗したため、犯人グループにより射殺されました。その後数時間経ってからでしょうか、警察のいわゆる特殊部隊が突入し、犯人を検挙、射殺しました。私は、警察によってその状況から解放された後、警察官に護衛されて百貨店の外に出て見ますと、あたりには、野次馬の姿は一つもなく、百貨店周辺は一般人立ち入り禁止になっていました。さらに、自衛隊のジープらしきものや自衛隊員もいました。」

そう、この特番で東都市・米花市以外の日本国民は真実を知る事となった。

その頃・・・

地下2階

目暮はコナンと話していた。

「地下4階に蘭くんはいるようだ、工藤くん。」

コナンは頷いてから言った。

「わかりました、警部。」

佐藤は心配そうにしていた。

「でも工藤くん。あなただけでその組織に立ち向かうのは不可能よ
！！ 私たちも行くわ！」

コナンは一步も譲らなかった。

「でも、これはおれと灰原2人の戦いです。」

高木もコナンの身を心配していた。

「でも、・・・やっぱり僕たちも行った方が・・・」

目暮はそういていた彼らを押しつけて言った。

「工藤くん、私たちは地下3階で待機する。」

佐藤は無線のコール音がなっていることに気づき、目暮に報告した。

「警部、今SATから状況報告が。」

「どんな報告だ？」

佐藤はSAT隊員が言った事をそのまま目暮に言った。

「地上3階から地下3階まで制圧。FBIは6階と4階以外制圧。

SAT担当地域は、後地下4階だけです。隊長から突入要請が出て
います。」

目暮は少し考えてから言った。

「工藤君たちの支援をしてもらおう。他の階同様、構成員がいる可能性があるからな。」

佐藤は納得して、

「わかりました。」と言った。

目暮は無線で何か話してから、コナンと哀に言った。

「工藤くん、哀ちゃんと一緒に4階に。」

コナンは頷いた。

「わかりました。」

その頃・・・

1階 化粧品売り場

3階にいて、大滝たちが大阪府警の力で現場から離れるように対応しようとしたものの、彼らは一回に戻ると言った。

和葉は平次に力強い声で言った。

「ほんなら、地下4階に行く？」

平次は和葉を危険な目に逢わせまいと思い、それを必死に止めようとしていた。

「待て！これは、男同士の戦いや！！俺らは行かんでええ！！！」

和葉は悲しそうな目をして平次に言った。

「そんなん……。じゃあ工藤くんらはどないするん……」

平次はつい本当のことを言ってしまった。

「工藤はあのちっこい姉えちゃんらとあの黒の組織っちゅう奴らをぶっ潰すやろうな……。あっ!？」

その言葉を聴いた瞬間、和葉の心の中で『絶対に助けてやる』と言う思いに火を点けてしまったと思い、平次はそれを収まるように言おうとしたが、時はすでに遅し。和葉の心の中では『私の親友と私の愛するものの親友（親友の恋人）』を助け出すと言う事を決心した。

「あらあら……。そんなところでケンカ？」

平次と和葉がいるところに園子ともう一人……

平次と和葉は同時に声をはもらせて言った。

「そんなんちゃうわ!! あっ……」

平次と和葉が大声でそう言った。その隣で耳をふさいでいる人が一人……。本堂瑛佑だった。

瑛佑「ぐあっ……。園子さん、この人たちは？ コナン君をさがそうとか何とか行ってませんでした？」

園子「瑛佑君、行くわよ!!」

瑛佑「あっ……。はい。」

和葉「なら平次!! 工藤君とこに行くで!!」

こうして地下4階での決戦が始まることになる。

第22話 第2章 東都百貨店での戦い 突入決戦編

地下4階への階段

目暮「まず、S A Tが、周辺の構成員を排除、次に工藤君たちが突入して、幹部を倒す。これでいいんだね？」

コナンは頷いた。

「はい、これでいいです。」

目暮「わかった・・・S A Tの準備ができるまで少し時間をくれ。では0時丁度に突入する。S A Tに連絡を。」

佐藤「わかりました。」

目暮「今が11時40分だ。少しここで休憩しよう。蘭さんを助けるのに、敵にやられて私たちが助けられるのはよくないからね。」

23..52

地下4階

親衛隊隊員サーモグラフィで人間の温度を感じた事をジンに報告した。

「隊長、警察が目の前に・・・どうしますか？」

ジンはすぐにその隊員に言った。

「親衛隊はオレと毛利探偵事務所に行って、毛利小五郎を殺せ！あいつは何か手がかりを持ってだろうからな！」

親衛隊隊長「わかりました。」

こうして、黒の組織の最強の要人暗殺等特殊工作部隊（親衛隊）とジン一行は、秘密のルートで脱出した。

0..00 地下4階

目暮はトランシーバーでSATに現在の状況を聞いた。「SAT各員現在の状況は？」

SAT班長「こちらSAT1班。地下4階階段前、準備完了です。」

SAT中隊長「こちら2、4班。警備室前、少年数人と現在待機中。行動準備、OKです。」

SAT班長「こちら5班。駐車場入り口、行動準備OK。」

機動隊隊長「こちら6班。地下4階出口前、準備完了。」

そのころ・・・

警備室

ジンは防犯カメラからの映像が入ってこなくなった事を受けて、警察が突入することは分っていた。そのため、部下に脱出場所を探させていた。

「ほかの潜伏場所はないのか？」

親衛隊員はトランシーバーで何か話してからジンに報告した。
「現在、警備室の排気口から逃走ルートの安全を確認中です。」

親衛隊長は恐る恐るジンに報告した。

「ジン。この近くにどうやら警察がいるらしい。」

ジンは鼻で笑いながら言った。

「フン・・・それくらい、この雰囲気に分かるだろ!？」

親衛隊長は神妙な面持ちでジンに言った。

「こちらから攻撃を仕掛けますか？」

ジンは笑顔とも取れるような表情をして言った。

「まあ、そう慌てるな。」

親衛隊長「分かりました。」

目暮「ただいま0..00だ。行動開始!！」

古川「行動開始!！」

こうして、決戦が始まった。

0..00 地下4階

目暮はヘッドセットから指示を出した。

「ただいま突入時刻だ。周辺の安全を確認。行動開始!!」

古川「了解。行動開始!!」

警察とコナンたちが音響閃光弾^{フラッシュバン}を爆発させてから突入した。

『バーン……』

コナンは底にいた黒服の男に向かって言った。

「お前は……ウオツカ？」

そこには、背中を向けていたウオツカがいた。そして、拳銃をコナンに向けて

「ちえっ……。でも、お前か……シェリーを匿っていて、さらに、この組織の事をかぎまわってたのは……それに、俺のコードネームを知ってるってことは、まあまあ調べてるってことだな？」

コナンは警察を呼ぶことも考えたが、警察に呼ばれば最期、二度と彼と話す事ができなくなると思ったため、警察を呼ばなかった。

「ああ、お前たちの事は色々調べさせてもらったぜ!!」

ウオツカは少し声を荒げながらコナンに言った。

「やはり、俺とこうやって話している以上はお前は死んでもらわないといけないな!!」

コナンにやっとしてからウオツカに言った。

「できるかな？」

コナンは時計型麻醉銃をセットしてウオツカに撃とうとしたその時・

『パンパンパン・・・』

ウオツカの持っていたトカレフから銃弾が発射された。

コナンとウオツカは5メートルと離れていなかったため、コナンの体に銃弾が貫いた。

『ウツ・・・』

その銃声を聞いたSAT隊員がコナンのいる方向にやってきて、MP-5サブマシンガンをセミオートで数回射撃した。

『ダダダン・・・ダダダン・・・』

ウオツカの足元と足にSAT隊員は射撃した。ウオツカは怯んでいる間にコナンが時計型麻醉銃をウオツカの額に向けて撃った。

『プシュ・・・』

『パンパン・・・』

コナンの時計型麻醉針とウオツカが最期に放った銃弾が同時に音を発した。

ウオツカは眠った。

コナンは、子供の型に合った防弾チョッキが警察に無く、また、防弾チョッキは子供に耐えられる重さでなかったため、着用していたものは一番小さいサイズの『防護ベスト』であった。そのため、銃弾を防護する事はできず、コナンは撃たれたのだ。

目暮は、コナンが苦しそうにしているのはわかっていたが、コナンに犯人の身元確認を依頼した。

「工藤君、主犯格はこいつか？」

コナンは息が絶え絶えになりながら目暮に言った。

「いえ・・・こいつは・・・日本支部の支部長の直属の部下です。」

こうして、ウオツカは警察の手によって逮捕された。

第22話 第2章 東都百貨店での戦い 突入決戦編（後書き）

用語解説…フラッシュバン

人質を取ったテロリストが建物に立てこもった場合、人質の命を守りつつテロリストを無力化する必要がある。また、人質がいなかったとしても、敵が待ち構えている室内への突入はかなりの危険を伴うものである。さらに情報を得る目的で拘束したりするために、テロリストを生かしたまま捕らえる必要が出てくる場合などもある。

ホステージレスキュー

こうした建物制圧任務や人質救出任務などで対テロ特殊部隊がよく使用するのが、フラッシュバン（※1）に代表される低致死性武器（ノンリーサルウェポン※2）だ。フラッシュバンは瞬間的に発する強力な閃光や大音響によって室内にいる人間の視力や聴力、平衡感覚などを奪って一時的に無力化する武器である。そのため破片を撒き散らして敵を殺傷する手榴弾とは異なり、必要以上に被害を与えず、生かしたまま無力化できる。

※1…スタングレネードと呼ばれることもある。

※2…ノンリーサルウェポンには、フラッシュバンの他にも催涙ガスやゴム弾、電撃を与えるスタンガンやテイザーなどが存在する。

しかし、フラッシュバンを使用した場合、心臓疾患などを持つ人間がいた場合ショック死する可能性もあり、殺傷しないとは限らないため「低致死性」という用語が使用される。

第23話 第3章 蘭救出へ・・・解説編

0..30

阿笠邸

小五郎は時計を見ながらゲームをしていた。そう、今回も狙撃される危険性があるからと言う事で本来なら警察から警備を受けることができたが、この百貨店占拠事件に多くの捜査員を配置したため、小五郎の警備ができなくなっていた。そのため、阿笠が小五郎の身を案じて、『推理ゲーム』の監修と言う事で実際の事件の話を聞いていたものの、その話はとくに終わっていた訳でなかったが、小五郎は黒の組織によって拉致された現在どこにいるか分らない蘭の身を心配していて、それ所でなかった。

「博士、私はいったんうちに帰ります。新一のやつがそちらに戻ってきたましたら、一旦うちに来いとお伝えください。」

阿笠は小五郎に『狙撃対象』となっていることを伝えた。

「毛利君、実は、あなたがその黒の組織の『暗殺リスト』に入っているんじゃないよ。」

小五郎は突然の事で驚いていた。

「何ですって！？ あっしが暗殺リストに入っているんですか？」

阿笠が冷静に説明した。

「そうじゃ。それに、君は過去に暗殺されそうになっていたんじゃないよ。前にもほとんど同じ事があったじゃろ？ そのときにも同じ組織の奴らから狙われていたんじゃないよ。そのときは蘭君が居ったから毛利君には言えなかったが・・・」

小五郎はその阿笠の言葉に何も言えなかった……しかし、小五郎は阿笠に言った。

「新一のやつ、未だに蘭を発見したって言う連絡がないんだ……一体どれだけでもたついてるんだ……博士、車貸してください。」

阿笠も小五郎のオーラからこれを制止する事ができないと思ったのか、阿笠は自身の車であるワーゲンのキーを小五郎に渡した。

「いいが……百貨店前までいけるのかね？」

小五郎少しくだけた様子で阿笠に言った。

「なあに、私なら顔パスでいけるでしょ。」

これには阿笠も笑うしかなかった。

小五郎は阿笠の車を運転して、コナンたちがいる百貨店まで向かって行った。しかし、途中で検問にあった。そして、検問をしている陸上自衛官に制止された。

「すいません。ココからは緊急車両以外通行禁止です。」

小五郎は顔パスで通行させてもらおうと、パワーウィンドウを空けて言った。

「あの……探偵の毛利小五郎なんですが。」

そういったものの、検問をしている陸上自衛官が言った。

「毛利さん。その百貨店での事件はもう解決したようですよ。」

小五郎は『ココでの』という言葉が気になり、自衛官にその言葉の意味を説明してもらおうと質問した。

「ココでのってことは他に何かあるんだろ？」

自衛官をしどろもどろとしながら小五郎に言った。

「そういわれましても・・・無線ではそうとしか言っていないんで・・・」

すると、検問でもたまたしている風景を見た警察官が念のために警棒を手に持ちながら自衛官の方に駆け寄ってきた。

「どうされたんですか？」

その言葉に小五郎と言い争っていた自衛官が答えた。

「この探偵の毛利小五郎さんらしき人がここを通せと・・・一応規則なので通行出来ないと言ったんですが、なかなか納得してくれなくて・・・」

小五郎はその警察官の方向を向いてから驚いた様子で言った。

「あんたは・・・高木刑事!？」

小五郎は高木刑事の格好を見て驚いた。高木が制服を着用していたので驚いていた。

高木は小五郎に事情を説明した。

「はい、毛利さんですね？コナン君、いや工藤くんは百貨店の中にいますよ。でも、蘭さんはまだ発見されていません。」

小五郎は警察官が蘭を搜索していない事に不満を持った。

「じゃ、何でこんなところに居んだよ!？」

高木がしどろもどろになりながら小五郎に説明した。

「蘭さんのほうは場所が全く分からないので・・・。それに、上か

ら自衛官と合同で検問してくれる人がうちの課に居なくて・・・毛利さん、しょうがありません。工藤君の迎えという事で特別に通行許可は出しますが、それでも一応規則なんで、念のためにちょっと車を調べさせてくれませんか？」

小五郎は自衛官や高木らに車のなかに不審物が無いか搜索したあと、問題ないと言われたので通行できた。

杯戸百貨店前

平次・和葉・園子・本堂・コナン・哀が出てきた。

コナンは小五郎に向かって叫んだ。

「おい。おっちゃん。」

小五郎は浮かない顔をしてコナンにボソツと言った。それはそうだろう。愛娘の蘭が誘拐されたと言うのに心配していない親はいまい。

「何だよかったく・・・」

コナンは小五郎に何かが分ったような顔をして言った。

「車、持ってますか？」

小五郎はそのコナンの顔を見て、何かが分った事は理解できた。しかし、あまりにも真剣な顔をコナンがしていたために、小五郎はそれに圧倒されて言葉が出なかった。

「あ・・・ああ。」

「じゃあ、東都高速鉄道の第3東都港ターミナル駅に！！」

このコナンの指示に小五郎は疑問に感じた。

「何だよ？」

コナンは小五郎に急かすようにして言った。

「蘭が、いや蘭さんがその駅のコインロッカーに居るんです。なぜなら、蘭が監禁されていたと思われる場所から地下鉄の地図が発見されて、マークがされてたからです。」

小五郎はコナンが言った事を全面的に信じた。それが蘭の唯一の手がかりなのだから・・・。

「分かった。まずコナンと、博士のところのお嬢ちゃん、それ本堂瑛佑は博士の車に乗れ！それで、財閥の姉ちゃんと大阪の2人は・・・」

その時、声が太い男性の声でした。

？「では、私の車にどうぞ。」

和葉はその声の方向に振り向いてから言った。

「お父ちゃん！」

そう、その声を言ったのは遠山和葉の父親である遠山刑事部長だった。

「毛利さん。私も行きます。」

小五郎は遠山の方を向いて深く礼をしてから言った。

「ありがとうございます。お願いします。」

遠山刑事部長は深々と礼をしている小五郎に気をつかいながら言った。

「いえいえ、そこまでしてもらわんでも……。なあに、毛利さんは何回も大阪で事件解決してくれてますし……」

遠山が話している途中に平次が割り込んだ。

「工藤んトコの彼女が死ぬ前に助けたらんと……。早よいくで！」

そうして、彼らは東都高速鉄道の第3東都港ターミナル駅に向かった。

その頃

全国模試前の江古田高校の2年生、黒羽快斗は今、ベッドで寝ようとしていた。そのとき……

『プルルルルル……プルルルルル……』

快斗は携帯電話の発信元に『ジイ』と書いてあったので急いで電話に出た。

「寺井。どうしたんだ？」

寺井^{ジイ}はあわてた様子で快斗に言った。

「快斗ぼっちゃま、大変です。」

快斗はその寺井の慌てように驚いていた。今まで寺井がそこまで慌てた様子を見せたのは数回しかなかったのだから……。

「どうしたんだ、そんなに慌てなくても……」

寺井

「実は、ハアハアハア・・・今すぐテレビ見てください。」

そう、このテレビとは日売テレビの特番だった。

快斗はそれを見て、「へーっ。結構大きな事件があつたんだな。」

そこで、寺井が快斗にあのことを言った。

「実はその放送の犯人の内容で思い出しました。盗一様が悪された犯人と、この百貨店の襲撃犯との特徴が一緒なんですよ!!」

『ナニ——！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！ツ』

快斗が驚かないはずが無かった。父親の黒羽盗一が何者かに殺された事件・・・その犯人の特徴と似ていたからだ。

快斗は張り切って寺井に言った。

「親父を殺した相手が見れるんだ!!」って寺井、どこに居るんだ？」

寺井は数秒考えてから言った。

「ん．．．．．まずは東都タワーに行きましょう。東都の中で一番高いですから．．．」

快斗は意気揚々と寺井に「ああ、分かった。」と言ったが、心の中で『って場所分かんのかい!』と思っていた。

こうして、怪盗キッドの元姿である黒羽快斗が動き出した。警察
や探偵^{コナン}新一達、そして彼らが追っている黒の組織の仲間や、快斗と
寺井が追っているパンドラらしき宝石ばかり狙う宝石強盗犯たちと
出会う事と知らずに・・・

第23話 第3章 蘭救出へ・・・解説編（後書き）

こんにちは、たくみ226です。今回で第3章に突入します。蘭救出をコナンはどのようにするのか・・・といってもすぐに終わってしまうかもしれませんが、恋愛要素も入っている部分ですので、お楽しみください。

第24話 第3章 蘭救出へ・・・救出編

1時27分

東都高速鉄道の第3東都港ターミナル駅

管轄外ながら、遠山は警視庁からの特別許可で駅構内に入ることができた。駅員は居なかったので、職員通用口にある遠隔操作式のカメラ付ドアホンから警備会社に許可をもらって入った。

移動中にコナンが目暮に連絡して、15分後に目暮、高木、佐藤ら捜査一課が、30分後には機動隊が到着する。

小五郎は車中でコナンがとっていた気になる行動をコナンに尋ねた。
「おい、コナン、さっき車内で誰に連絡してたんだ？」

コナンはその問いに答えた。

「目暮警部だよ、もしも鎖とかで縛られてたら、機動隊とかの道具で開けないといけないからな!!」

「ここにコインロッカーが・・・ってこんなにいいいいいいいいいい!!」

小五郎がそのコインロッカーを見て驚くのも無理は無かった。なぜなら、この駅のコインロッカーの数を見て驚かないのはコインロッカーを製作してる会社の人ぐらいだろう。そう、この駅はコインロッカーの設置台数のギネス記録挑戦のために、大量のコインロッ

カーが置かれていた。しかし、あまりの多さとスペースを必要としたために開業直後だけの運用とし、数ヵ月後に東都高速鉄道の全駅で使いまわしをしても、まだここには3200個も存在していたからだ。

小五郎は全員に向かって大声をあげて言った。

「全員で手分けだ!!」

コナンがすぐにそのコインロッカーを探そうとする小五郎を止めて言った。

「待ってください、おじさん。このコインロッカーの鍵の形を見てください!!」

小五郎は、自分の目の前にあるコインロッカーのキーを見た。

「鍵の形って・・・これは、指紋認証式の？」

コナン「そうです。これでは我々は解除不能です。」

小五郎は傍にある壁に『ドン』と叩いてから言った。

「くっそー。どうしたらいいんだ？」

コナン「ヒントならありますよ! ヒントはこれです。」

小五郎はコナンが出してきた地図を見た。その地図には『東京23区鉄道マップ』と書かれたものであった。

「何だ? ただの東京の鉄道地図じゃねえか？」

平次「これは犯人が残したメッセージ。」

コナン「ここの2種類のマークを見てください。」

小五郎「この○のマークは東都高速鉄道の第3東都港ターミナル駅にしかないな・・・でも、☆のマークは東都高速鉄道の東都駅と、TR東都海岸線の東都臨海ジャンクション前駅の2つにあります。そしてこのコインロッカーの番号は4ケタ。」

小五郎は、それとの関係がわからなかった。

「だからなんだよ？」

平次「毛利のおっちゃん。これ分かんかったら探偵失格ちゃうん？」

小五郎は平次にけなされているあいだ、ずっと唸っていた。

「うう・・・ん・・・あっ分かったぞ!!」

小五郎「この駅の番号だ!!」

コナン「そう、正解です。」

平次は軽蔑するような口調で小五郎に言った。

「こんな探偵ならすぐにわかるもんちゃうん？しかもおっちゃん

『元』刑事やのに・・・」

小五郎「うっせえーな！ほっとけ!!」

園子「その駅の番号って何？」

コナン「園子。今から説明するよ。まず、駅に付けられた整理番号みたいなものがあって、もともととは韓国の地下鉄についてたんだ。

「ただ今東京にもついてるんだ。」

平次「まず、この東都高速鉄道の東都駅。ここの駅に付けられた番号はTH-01。」

コナン「次に、TR東都海岸線の東都臨海ジャンクション前駅は駅番号がS-15。」

平次「もう分かるやろ？」

園子「そっか、ということは、ロッカー番号が0115か、1501の2つね!!」

コナン「そう、正解だ、園子!そこに蘭が隠されてるんはそれで決まり!」

園子はちよつとニタツとしながらコナンに言った。

「そうねえ。ここはダンナの工藤君が探さなきゃね!」

「おいお前ら!勝手に何言ってるんだ!」

小五郎はこんな工藤の様な奴に蘭を渡せるか?と心の中でそう思っていた。

コナン「ここには約3200個のロッカーが存在している。それが問題だ。」

平次「しかも、利用客に発見されてるんは始発の5時1分。」

コナン「今は2時30分。残り時間は2時間31分。」

其のとき、どこかで聴いたことのある声が普通のおじさんと言われる人よりも少し高い男の声がした。

「毛利君。こんな所に居たのか。探したぞ!!」

小五郎「警部殿・・・それに、20人位警官がいるじゃねえか!!」

目暮は機動隊の特殊工作係や、制服警官に指示をしようとした。

「では、これから全ロッカーの・・・」

目暮が警察官たちに指示を出そうとしたその時、小五郎が警部に言った。

「警部殿、実は私達の推理では、0115か1501の2つに絞ってるんです。」

目暮「分った。それなら手っ取り早いだろう。とにかくみんなでその2つを探すんだ!!」

警察官全員「はい!分かりました!!」

目暮が警察官に指示をした。

「では千葉とわしは駅のホームにある宅急便取り扱い室に、高木と佐藤は駅改札口近くの足湯にある大型ロッカーを!!」

高木・千葉・佐藤「はい、分かりました。」

目暮「タイムリミットは、始発の5時までだ!!」

こうして蘭の搜索が始まった・・・

3時2分

小五郎「ここだ!! 0115だ!!」

コナン「ここに1501があるぞ!!」

目暮警部は、機動隊の工作部隊を呼びつけ、作業を開始した。

0115は中をこじ開けたところ、中には拳銃が入っていた。しかし、そのなかには蘭はいなかった。そして、最後の頼みの綱である1501を機動隊はこじ開け始めた。

0115のロッカーの前で、コナン（正体がばれた新一）と、小五郎が何やら話していた。

小五郎「おい、新一! もしもここに蘭がいなかったら、どうするんだよ!!」

コナン「それは・・・。とにかくここに蘭がいてほしい気持ちでいっぱいですよ!」

小五郎「そうか・・・やっぱりお前、蘭の事が好きなんだろ?」

コナンは赤面をして、小五郎に何もいえなかった。

「・・・・・・・・・・」

小五郎「どうなんだ！新一！！！」

この瞬間、コナンは、小五郎に、蘭への気持ちを正直に言った。

コナン「はい。蘭、いや、蘭さんは好きです。いや、愛しています！」

小五郎はやっぱりと思ってたが言った。

「そうか・・・お前が蘭を助けることができて、なおかつ、誘拐した犯人をお前の手で捕まえたら・・・俺は、お前が、蘭と付き合っても、結婚しても、・・・許す。いや、そこまで蘭を助けたお前に結婚してほしい。しかし・・・」

コナン「分かってます！！蘭が誘拐されたのは、全部オレの責任です！！！！！」

小五郎「ああ、分かってんじゃねえか。」

コナン「分かってますよ！！もしオレが毛利探偵事務所にいなければ・・・」

小五郎「待て！新一！！お前は、江戸川コナンとして、蘭にとって必要な人間なんだ！！！」

コナンは少し驚いた様子をして言った。

「えっ・・・」

小五郎「少なくとも、蘭は俺の目の前では隠していたが、俺には分かっているんだ！蘭はお前のことを心配していて、心の中で苦しんでいた。しかし、お前がウチに来てから、蘭は、お前に何かを感じた。そう、コナンがいたおかげで蘭が新一の事だけを考え過ぎて、どんな作業にも取り付けないようなことや、うつ病のような症状にがならなかったんだと思う・・・しかし、お前は、蘭の気持ちを直接、蘭はお前が新一だと知らずに言ってしまった。そこが問題だ・・・だから、お前が蘭を大切にするのなら・・・お前が、蘭の事を思うなら・・・蘭にとっていい方法で江戸川コナンは蘭の元を去ってくれ。そして、工藤新一として、蘭の目の前に現れてくれ！！」

コナン「おっちゃん・・・」

小五郎「お前のためじゃねえ。蘭のためだ！」

コナン「分かりました。」

機動隊隊員「毛利さん、娘さんが今から出ます。保護してください。」

小五郎「おい、高木！」

高木「は、はい！何でしょう、毛利さん？」

小五郎「お前、車あるよな？」

高木「はい。」

小五郎「蘭をその車に乗せて、病院に向かってくれ！」

高木「はい！」

蘭は救出された。

蘭「お、お父さん」

小五郎「蘭。蘭、大丈夫か！？」

蘭「お父さん、コナン君・・・（涙）」

コナン「蘭姉ちゃん・・・大丈夫？」

高木「さあ、蘭さん、歩けますか？」

蘭「は、はい・・・」

高木「じゃあ、車まで佐藤さんに掴まってもいいですから歩いてください。」

佐藤「じゃあ、蘭さん、掴まってください。」

蘭「は、はい。」

蘭自身は歩けるといっていたが、結局蘭は佐藤刑事に掴まらないと、歩行する事は困難な状況だった。

小五郎・コナン「蘭、無理するな！歩かなくても、担架を持ってきたらええ・・・」

蘭「ううん。大丈夫だから・・・」

小五郎・コナン「蘭・・・」

小五郎「蘭、お前には、今まで苦勞をかけちゃったなあ・・・英理と別居して、お前に家事をやらせちゃって、結局、蘭がこうやって、お前一人で考え込む・・・」

そのとき、コナンはあるものを蘭に向けた。

『パシユ・・・』

『ボタン・・・』

小五郎「おい、工藤！蘭に何をした！！」

コナン「これ以上蘭に辛い思いをさせるのはいやです！！だから、時計型麻酔銃で、蘭を眠らせました。」

小五郎「工藤！蘭は起きるのか！？」

コナン「当然、1時間後までには起きてくれるでしょう。」

小五郎「本当に起きるんだろうな！！」

コナン「当然起きますよ！だって、貴方はそうやってぴんぴんしてるじゃないですか！」

小五郎「俺が？なぜ？」

ひそひそ話・・・

高木「佐藤さん。コナン、いや、工藤君は、毛利探偵にいつもアレを使って推理してるんじゃないですか？」

佐藤「大方そうでしょうね・・・ただ、起きて推理していたときは、ほんとうに毛利探偵が推理していると思うけどね・・・」

高木「工藤君を、一旦、われわれが尋問しますか？」

佐藤「そうね・・・この誘拐犯の重要な目撃者・情報提供者として取り調べましょう・・・」

高木「はい、では、蘭さんの状況が良くなり次第、尋問しますので。」

佐藤「分かったわ。白鳥警部に許可をもらっておくわ。今回の事で調べたいから、取調室を使わせてくれとね。白鳥君なら、私の言うこと聞いてくれるだろうし、あまり詮索しないと思うから・・・」

高木「佐藤さんなら、警視庁中の男性警察官が言うことをきく気がするんだけどなあ・・・」

佐藤「高木君。何か言った？」

高木「い、いえ、何も・・・」

こうして、蘭は検査や、休養・リハビリのために、緑台警察病院に搬送された・・・

第24話 第3章 蘭救出へ・・・救出編(後書き)

こんばんは、たくみ226です。

次回更新が今月中にできればと思います。

第25話（4日目） 第3章 探偵への取調べ

警視庁捜査一課、取調室

この取調室の内には、中央に机とイスのセットが対面式であり、ドアに近い方には書記専用のパソコンと机があった。また、壁越しにマジックミラーが存在しており、そこからも取調室の様子が閲覧できるものの、今回は誰も見ていない。

コナンがマジックミラーと対になるように座り、佐藤がコナンの向かい側に座った。高木はイスに座らずに壁に立っていた。そして、今回は非公式の取り調べであるため、書記は存在せず、監視カメラも設置していない。

高木はコナンに驚きを悟られたくないのか、事務的な口調でコナンに言った。

「では工藤君。早速だが、身元確認のために、指紋照合と血液検査をしてもらおう。」

コナンは疑問を持っていた。自分の証言だけで何とかなると思っていたからだ。

「何ですか？」

そこで、高木がまた事務的な様子で淡々と語った。

「鑑識さんか科捜研に調べてもらって、工藤君のかかりつけの病院にある血液検査のサンプル、及び、工藤君の自宅にある工藤君の指紋がある本と照合し、同一人物か確認してもらうためだよ。われわれは君が工藤君だと100%証明しないといけないからね。」

さらに、佐藤が高木の言葉に補足した。

「それに、われわれ警察としては、自供だけでは動けないから・・・」

コナンは理解し、「はい。」といった。
こうして血液検査と指紋照合をした。

血液検査&指紋照合終了後・・・

コナンはその結果の用紙を見て、笑みを浮かべながら2人に言った。
そう、その報告書の中には『江戸川コナンは工藤新一が同一人物である可能性が99.99%以上であり、同一人物である可能性が極めて高い。』と記されていた。

「これで僕は工藤新一として認めてもらえたってことですよね？」

そして、高木・佐藤の2人は心の中で驚きながら、平常心を保とうと努力しながら言った。

高木・佐藤「ええ、この結果では私たちも完全に認めるわ。」

そして、佐藤がコナンに聞いたかったこと・・・すなわち、どうしてこうなったかという『理由』と『方法』を尋ねた。

佐藤「で、工藤君、何でこんな姿になったの？」

コナンは少し口を濁しながら、「それは・・・」と言い、数秒間をおいた後でコナンは、ジェットコースター殺人事件の後の出来事を話した。

もちろん、そこで使われたAPTX4869の全容についても語った。

佐藤と高木は、コナンに起きた事実を知ったものの、しばらくそれが信じられなかった。

佐藤はコナンに問い詰めてみた。

「それで、何で警視庁わたしたちに言わなかったの？」

すると、当然だと言わんばかりのこえでコナンは佐藤に言った。

「警察は証拠のないものにはほとんど反応しないからです。そうでなければこんな形で言うつもりはありませんでした。それに、いくら僕が被害にあってからすぐに言ったとしても、皆さんに信用していただけるとは思っていませんでしたし。」

高木はそのコナンの声を耳にし、頷きながら言った。

「確かに、我々は証拠がないと動けないからねえ……。それに、犯罪の証拠がないとなると、すぐに捜査は打ち切りになってしまいうし……。イタッ!?!。」

佐藤は、コナンの言った事に同調した高木を、コナンにわからないように、コナンが座っている机の下で高木の靴を踏んだ。そして、何事も無かったかのような様子で、佐藤は話を切り替えた。

「それで、まさかとは思うけど、今までにその格好で生活しているのだから、誰かがあなた（コナン）の支援をしていたのは当然よね？ 戸籍を偽造して小学校に入学したり、子供を育てると言うのだから、養育費等でお金もかかるし。で、正体を知っているのは誰？」

コナンは少しためらっていた。

そこで、佐藤がかなりコナンにきつく言った。

「もしも工藤君がそれを言わないのなら、警察にも、やりたくは無わたしたちい方法だけど考えはあるわ。」

コナンは、ためらいながらも、ここまで佐藤に言われて何も言わないわけにはいかなかった。コナンは取調室の空気を読んで正直に言

った。

コナン「はい、俺の正体を知っているのは・・・阿笠博士に・・・オレの父さんと母さんの工藤優作と工藤有希子。それに、大阪の服部平次と・・・阿笠博士のところに居候している灰原哀、それに・・・おそらく怪盗キッド。」

高木は『怪盗キッド』と言う言葉に驚いた。

「へえ・・・怪盗キッドも工藤君の正体を知ってるんだ。」

佐藤は冷静に、いや、事務的にといったほうが適切だろうが、コナンに問い詰めた。

「じゃあ、工藤君。貴方は怪盗キッドの正体は知ってるの？」

コナンは佐藤たちに正直に話すことにした。

「正体は知りませんが、僕が知っていることをすべて言うと、工藤^オ新一の顔にそっくりで、恐らく17、18歳ってことくらいですかね。それと、マジックが得意って言うところですね。」

佐藤はそれを聞いてすぐに高木に指示した。

「高木君。じゃあ、貴方はこの取調べが終わった後に怪盗キッドのことについて二課の中森警部の所まで行ってきて頂戴。」

高木「はい、分かりました。」

江戸川コナン、いや、幼児化した工藤新一の取調べ終了後、高木は即座に捜査二課の方向へと駆け足で向かった。

捜査二課

高木はあまり人のいない捜査二課でテレビを見ている人に恐る恐る聞いてみた。

「あのう・・・中森警部はどちらに？」

すると、男は高木のほうを向いて言った。

「はい、わしだが。何か用か？」

高木はそこで、自分の所属を言おうとした。

「私はその捜査1課の・・・」

中森はその顔と声ですぐに思い出した。

「ああ、思い出した。お前さん、あの目暮のタヌキの部下か。」

高木は『タヌキ』と言う言葉に少し疑問に思いつつ、相槌をうった。中森は課の違う高木にかまっている暇はないといって、煙たそうに言った。

「それで、一課が二課に何のようだ？用が無いなら帰れ！こっちは毎日怪盗キッドが出てこないか、予告上の調査やその他の事で調べてるんだからなあ！！」

高木は言った。

「だから怪盗キ・・・」

この瞬間、中森警部と捜査二課にいた捜査員全員が今までの様子や口調から様変わりし、飛びついてきた。

「か、怪盗キッド！！で、であいつの何なんだ？予告状か？それともあいつを捕まえたのか？」

高木は先ほどの表情とは違う中森警部に驚きながら、キッドの情報を言った。

「さつき、うちで取調べをしていた参考人が、キッドの正体が高校生で、工藤新一の顔とそっくりだって言ってたんで。」

中森は課が違うため、工藤新一の事についてはあまり知らなかった。

「工藤・・・聞いたことあるような無いような・・・」

そこで、中森のすぐそばにいた刑事が、中森に耳打ちした。

「警部。前に時計台の宝石を盗むとかいった事件があるじゃないですか？そのときに警部の手柄を取ったあの高校生探偵ですよ。」
その刑事の言葉でやっと工藤新一のことを思い出した。

「ああ、あのいつかの時計台の事件のときにいた、あいつか？で、あいつがどうかしたのか？まさか、あいつが怪盗キッドとか!？」

えらい剣幕で高木に言ってくるので、高木は驚いていたが、手で諫めるようにしながら言った。

「いえ、工藤君がキッドではなく、彼と瓜二つの人間が怪盗キッドなんです。じゃあ、捜査がありますので私はこれで。」

中森は少し機嫌を良くしたので、少し浮かれた口調で言った。

「ありがとさん!!」

と言いつつ、彼の心の中はすでに怪盗キッドモードと言ったほうがいいようになっていた。

「前にも高校生っぽい奴が怪盗キッドだった事が・・・そっか、快斗くんのことか、でもアレはシロだと思ったのだが・・・警視総監のお坊ちゃんも確か前にそんな事を言ってたような言ってなかったような・・・よし、この際もう一回調べてみるか。」

第26話 第3章 政府の苦悩

東京都

千代田区 永田町

先の東都百貨店占拠事件で責任を取り、古泉首相の内閣は退陣し、その後継として、若干55歳であるものの、政治界のカリスマといわれる熊が首相に就任した。

首相官邸 執務室

熊はため息をついたあと、自らの執務室のイスに座っていた。

「まったく・・・なんで私がこんな後始末を。ただでさえ、うちの党内でさえ反発が出るのに・・・これでは次の選挙には野党に政権交代されるんじゃないのか・・・まったく、重要な時期にテロなんてしてくれたものだ。」

『トントン』

執務室の扉にノックしてきた人がいた。熊は、ほとんど無い休憩時間がこれで奪われるのだらうと思うと、ちょっとイラついていたが、さすが政治家である。素っ気無く「誰だ?」といった。

すると、秘書が少し慌てた様子で首相に言った。

「首相。これから、公邸の大食堂で、非公式の安全保障会議が開かれます。」

熊は、『非公式』という言葉で眉を細めた。しかし、その事よりも今は昔より機能的な官邸があるのにも関わらず、旧首相官邸はかなり古い。そう思い、公邸ですするという多少の不思議があったので秘

書に聞いた。

「何でまた公邸で？」

秘書はメモを見ながら熊に言った。

「警察庁と防衛省・国土交通省が要求しています。何でも、古泉首相がそうしてたとか・・・」

熊自身は参加したくなかった。なぜなら、『安全保障会議』は日本の安全保障に関係していくことで、日本の安全保障といえば、彼らにはその象徴となる『東都百貨店占拠事件』の事だと用意に推測できたからだ。そして、それに参加しなければいけないということ、旧政権の後片付けを自分がしなくてはいけなくなったのも同然になるのだから、こういうのも無理は無い。

「んん・・・分かった。私もそこに行こう。私がいなければ会議も何も無いだろうし。」

こうして、熊首相は、公には反対していたこの動乱の大本となった安全保障会議に参加した。

非公式安全保障会議

安産保障会議とは、日本の内閣に置かれる機関のひとつで、国防に関する重要事項および重大緊急事態への対処に関する重要事項を審議する。

議長は当然のことながら内閣総理大臣で、議員は、内閣総理大臣臨時代理にあらかじめ指定された国務大臣（2000年4月以降は原則として内閣官房長官）、総務大臣、外務大臣、財務大臣、経済産業大臣、国土交通大臣、防衛大臣、内閣官房長官および国家公安委員会委員長で、議長は、必要があると認めるときは、その他の国務大臣を、議案を限り議員として、臨時に会議に参加させることがで

きる。

防衛省の官僚の中で偉い事務次官が首相や諸大臣が座っている長方形の席からではなく、窓際に申し訳なさそうにあるイスから立って、前のプロジェクターがあるところに立って言った。「この事案は、我々防衛省とそちらにいる警察庁、警視庁から持ち出されたものです。」

防衛省事務次官がそういうと、大食堂の中にある全ての蛍光灯が消え、暗幕が張られ、プロジェクターが動き、それが動いた事を確認すると、警視庁警視総監代理である吉村が資料を読みながら言った。「はい、この事案は、簡単に言えば、ある世界的なマフィア……いや、テロ組織のような大規模犯罪者集団が起こした裏切り者狩りやテロです。そのテロ活動がこの日本で起こるその理由は、その組織に警視庁の一部警察官、私立探偵、それにFBI捜査官、さらに、公安調査庁からの調査によるとCIAのNOCノシ・オフィシャル・カバ即ち民間人に扮したCIAのスパイが関わっていて、このテロ集団が『疑わしきものは1人残さず抹殺する』方針だからです。」

熊は吸っていたタバコを灰皿にこすり、不機嫌な様子で吉村に言った。

「……ったく、この国でよくもこんな事を。それで、詳細を続けて。」

吉村は自分の政治生命しか頭に無い首相を見て少しため息をしてから言った。

「この資料をご覧ください。まずは、この、新幹線爆破未遂事件です。これは、新幹線の中で取引していた女を新幹線ごと爆殺害する

というものでした。当初は犯人が不明だったのですが、ある証言によって、その犯人が、この集団だと分かりました。次は、西多摩市のツインタワービル爆破事件です。」

熊はそのことを思い出すようにして言った。

「ああ。私も覚えているよ・・・あれはテレビで見たが、本当のテロだったねえ。それに、西多摩市の市議会議員が死んでしまったよ。うだし。そのことに関しての自衛隊の災害派遣要請にもかなり手間取ったとか何とかで、近傍派遣をして陸自で数人・・・失礼。続けて。」

熊がそのあとの言葉を言わなかったその理由・・・というのも簡単だが、首相の右の窓際に緑の制服を着用し、『陸将』を表す階級章を着けている人がいるのが分かり、彼が首相の方を向いていたからだ。

吉村は熊が言い終わるとすぐに言った。

「この爆破事件も、同じ証言者によって、コンピュータ会社役員を殺害し、その組織のデータを破壊するためだったという事です。さらに、その組織の関係者がその組織からの裏切り者を殺害するため、近くのビルから狙撃しましたが対象は別人でした。しかし、不幸中の幸いで、その対象には当たらなかったという事です。」

熊はもうそれだけだろうと言わんばかりの気迫をこめて吉村に聞いてみたものの、吉村はその話に続けた。

「そのほかにも、数々の事件を起こしているようで、未解決重大事件といえる案件の多くがこの組織、または関連した一派が行った犯行である可能性が高いとも報告を受けています。杯戸シティーホテルで呑口元議員が死亡した事件の犯人は、その組織の仲間でしたが、大手自動車メーカーの会長でした。」

熊は、呑口氏が国会議員になる前に国会議員の議員秘書として雇った経験を持つ。いわば、彼の恩師といえる人間だったからか、かなり動揺していた。

「そんなとこまで浸透してるのか？」

吉村は軽く縦に振ってから言った。

「はい、私が調べているところでは、そこが限界です。一説によると彼らは、要人暗殺は得意中の得意分野らしく、腕利きのスナイパーが何人もいて、それに爆発物のプロも多いとの情報が・・・」

熊「それで、なぜ警察力で対応が不可なのか？」

吉村「それは、彼らは、米軍と互角に戦えるからです。」

熊は信じられないような思いになり、つい本音を言ってしまった。

「そんなに強い組織なのか・・・」

そこに追い打ちをかけるように、吉村が続けた。

「それで、組織の日本支部に入りましたが逃走され、杯戸百貨店に逃げました。幹部らしき容疑者1人、構成員13人逮捕、構成員32人が死亡しました。それと、S A Tや警察官での殉職者が15人発生しました。また、民間人5人ほどが死亡しました。」

熊は驚きながら言った。民間人に死者が出たからだ。

「そ、それは、警察だけでか？しかも、民間人が死んだだど!？」

吉村はそれに頷きながら淡々と話を続けた。

「古泉前首相が自衛隊派遣に否定的な意見を発した事で、自衛隊が実戦に立てることはできずに後方に出していました。そこで、同じ警察でならと緊急の内閣府令を出して、S A Tを警察庁長官の支持・要請・命令によって越境させて指揮できることになり、神奈川・千葉・北海道・大阪府警に協力を要請しました。しかし、彼らも担

当地域の警備がありますのでそれを勘案してこの数になったのです。しかし、彼らが全力でがんばっても20～30人程度は分散して逃走したようです。」

熊はその数だけでも驚いていた。しかし、彼には驚きよりも死者が出たことに関しての怒りの方が強かった。

「そんな人間をみすみす逃がすなんて、警察はそんなに弱いのか！？」

吉村「どうやら、突入する前に逃げ、検問があることを見越して武装解除をして、民間人に扮したり下水道等を使用して逃走したようです。」

熊「今、どこに潜伏しているのかの情報は？」

ここで公安審査委員長と公安調査庁長官、それに内閣危機管理監が吉村たちがいた窓際の席から立って、プロジェクターのあるところまで移動した。その間、防衛省事務次官と吉村は端に寄った。

「現在位置の正確な情報は不明ですが、我々、公安調査庁による未確認情報では、神戸と横浜、新潟に怪しい動きがあるということです。また、警察庁も公安などから・・・」

その説明が終わった後、熊は即座に法務大臣と警察庁長官に命令した。

「神戸・横浜・新潟を監視しなさい。必要なら警視庁等の特殊部隊の出動をしてもかまわんだろう。」

吉村はその命令に少しがっかりしていた。警察で無く自衛隊の出動をすることを目論んでいたからだ。そして、そういったすぐ後に首相に詰め寄って言った。

「すでにSATは、大阪府警が神戸を、警視庁が横浜で警戒および

出動をしています。首相、そうではなく、是非、陸上自衛隊に出動要請を！この状況下では警察が対応できる能力をすでに超えています！警察比例の法則からも見て明らかでしょう！

ですから国民の安全を守りたいのであれば、国民の支持を得たいのなら、政治的影響よりも、今すぐに自衛隊を出動してください！！」

警視庁の警視総監の代理でしかない吉村のこの発言は、熊首相を始めとして、この大食堂にいる全ての人間を驚かせることになった。なぜなら、普通、官僚とは自分の組織だけで事案を解決させたいのが常識とされている。そのための弊害として『縦割り行政』とか『政府や役所は動くのが遅い』とメディア等で常日頃から非難されるのである。吉村のこの発言は、警視庁が警備面を防衛省に丸投げしたともいえるような発言でもあるが、それにしてもこんなことを言う官僚がいることにみな驚きを隠せなかった。これに乗りかかり、防衛省・自衛隊を活躍させたいと、防衛省事務次官が首相に言った。「首相、ぜひともここは自衛隊がテロリストを制圧させてご覧頂きましょう。警察の対応できる力を超えています。ここで次も少ない死者で警察が対応できるかどうかは分かりません。」

熊はじっくり考えていた。

防衛省事務次官「すでに日本国内でアメリカのFBIが動いてるんです！日本の警察や軍隊がいかに強いかを世界中に見せるチャンスです！！それに、有事法制を利用を実践するチャンスです！！ぜひとも自衛隊と警察の合同制圧を・・・」

熊は結論を出したようで、ゆっくりと軽く呼吸を整えてから言った。「分かった。潜伏場所が発見できたなら、またここで安全保障会議を設置する。そこで発言する。とにかく今は、百貨店付近に展開し

ている自衛隊の撤収準備を！！」

こうして、安全保障会議は終了し、首相はマスコミに対して、東都百貨店に世界的な超大規模武装グループによる立てこもり・殺人事件で、犯人は逃げているが、今は、最悪でも拳銃だけの武装であることから、警察官のパトロールの強化をして逮捕に努めると発表した。

また、百貨店付近を警備・警戒していた自衛隊は撤収し、同時に自衛隊展開に関して出されていた全ての首相命令等は解除され、一応の平静を取り戻した。

第26話 第3章 政府の苦悩（後書き）

こんにちは、たくみ226です。

今回までが3章ということで、蘭救出を中心に東都百貨店占拠事件の後片付けを中心としました。

次回からは第4章に入っていきます。第4章は『死』と『戦闘』が主になっていきます。

今回の決定で自衛隊に関しての名言を首相が避けた事で、何が起これてしまうかを中心に話が進んでいくと思います。

第27話 第4章 組織の反撃

19時15分

神戸市 神戸港近くの倉庫

ジンとその一行は東京から変装によって脱出した。ジンは、これを用意していたかのような、何事も無かったかのような声で一緒に脱出した親衛隊の人間に言った。

「何とかここまでできたか……。まあいい。」

親衛隊隊長はジンに、残念そうな様子で言った。

「ここに来るまでに2人死亡しました。」

ジンは、そのことを聞いていない様な表情をしていた。

ジンにしてみれば、彼らは『虫けら』と同じような扱いだった。

「とにかく、このわれらの日本支部の発祥の地に着いたんだ。ここで一休みしよう。といたいひそひそが……」

というと、ジンは親衛隊隊長に秘密話ひそひそをした。その話を聞いた親衛隊隊長は心の中で驚きつつ、それを表情に出さまいとしていた。

「ああ、分かった。私は東京に戻ってやってみる。そうすればカンパニーにバレかけだった日本での組織の全般と勢力を建て直しをすることができるといふことは……とりあえず、あの船の用意はする。」

親衛隊隊長はジンにいつ出発するのかを感情が掴めないジンに慎重に言った。

「いつでしょう?」

ジンは淡々と語った。

「あさって23時40分。まずは、ポートアイランドのヘリポートからウオッカの用意したヘリ3機を使う。ヘリは3機のうち、1機はオレが、もう1機は親衛隊が、そしてもう1機は護衛・すなわち囷だ。もともとウオッカは2機といていたが、用意がいいな。」

大阪連絡所所長はため息をついてから話し始めた。

「これを実行するのに色々苦労したんですよ。神戸の同業者、まあ、日本語で言う暴力団に協力してもらったんです。もちろん、飼い殺しにするために外部者ですが報酬をして、24時間監視してますが。」

ジンは、その普段から冷徹な眼差しを大阪連絡所所長に向けながら言った。

「わかった。よくやってくれた。それで、ヘリでどこまで行くんだ？まさかアメリカまでいけるわけないだろ？」

大阪連絡所所長もまさか・・・というような口調でジンに言った。

「まさか、そんな非現実なことを誰がすると思いで？ポートアイランドを出港したタンカー、フリーダム224号にヘリコプターをつけてそこで荷物や人をおろすのです。もちろん、それをするのは深夜ですが・・・では、あさってまで、ご自由に・・・」

親衛隊隊長は大阪連絡所所長にここの警備のことを質問していた。

「ここの警備員の配置は？」

大阪連絡所所長「はい、倉庫と港、それにヘリポートには半径3キロ圏内は、人が通れるスペースはすべて監視員を配置。1班6人の特殊部隊と、神戸のの同業者を配備してる。安全です。なんたって、

組織の高級幹部で、私の上司、そして、命の恩人のジン様の警護なんだから、ここまでして当然です!!」

そう、この大阪連絡所所長は、職が無かった頃、抜群の体力と筋肉を持っていたことにジンが目付けて、凶悪犯罪を起こす代わりに、トレーニングルーム、最高の衣・食・住のもてなしで、さらに高報酬と豊かにさせてもらったのである。

こうして、黒の組織は、体制建て直しのために、世界の総合本部のあるアメリカに戻る準備をした。

東京駅

親衛隊隊員（以下隊員） 「隊長。またここに来たんですか？」

親衛隊隊長（以下隊長） 「ああ、アイツらを戻すためにな!!」

そう、親衛隊の18人はジンの指示で東京に戻ることとなった。

隊員は鍵を持ちながら隊長のいるところに向かっていった。そして、隊長の目の前で報告をした。

「レンタカー3台、ワゴン車を借りてきました。」

隊長「おう。なら、1台に6人乗れ!! まず、トヨタのノアのほうは、日産のエルグランドと一緒に米花警察署に。ホンダのステップワゴン は警視庁（本庁）へ行ってくれ。そこで潜入して内部情報を得てから作戦開始だ。」

隊員「アイ・サー（了解の意）」

隊長「分かっているとは思いますが、警察は過去最強の警備を実施している。警察と無駄な交戦をするな。分かったな!」

隊員全員「アイ・サー」

都内某所 武器庫

東京駅から一時間したところにある、組織の小規模な武器庫の到着した。

隊長は隊員に武器の積載量を指示していた。

「ノアの方には小銃6丁と手榴弾6発と拳銃7丁、エルグランドのほうは、小銃8丁と拳銃10丁と手榴弾10個、ステップワゴンのほうは、小銃6丁、スタングレネード5個、対戦車ミサイル2基を搭載しろ！」

隊員はその武器の量がやけに多いなと思い、隊長に質問していた。

「隊長、交戦しない場合でもかなり大掛かりなものを持ってきましたね？」

隊長「わが組織は常に念のために備えるのがモットーだ！！それぐらい教育中にいやほど覚えさせられたことだろ！？」

隊員「そうですね・・・」

隊員達がこう言うのは無理も無い。黒の組織の犯罪者&構成員教育施設で、このモットーを教官に毎日朝飯前に100回言わされていたからだ。

こうして特殊工作、即ち、警察内部の組織の資料破壊と、警察に捕まったウオッカの救出・捕獲を開始した。

第27話 第4章 組織の反撃（後書き）

こんにちは、たくみ226です。

久しぶりの更新になりました。

最近は学校があまりにも急がしすぎて本当に困ったものです。小説の更新が当初の予想よりかなり遅れています。温かく見守っていただければ、僕としてもこんなに嬉しい事はありません。

どうか、読者の皆様方、最後まで読んでやってください。お願いします。

第28話 第4章 快斗の行動

深夜 東都タワー

「寺井。本当にココから分かるのか？」

快斗が寺井を怪しんでるように言った。
すると、寺井は自信たっぷりに言っただけだ。

「ええ、快斗坊ちゃん。ほら、ココですよ、ココ！」

そうやって寺井が指していたのは、東都高速鉄道第3東都港ターミナル駅の前であった。

この時間、コナンたちが蘭を捜索している途中だったので、パトカーらしきものが止まっていた。
それを普段あるもののちよつとした違いでも分かるような快斗が見つめるのは容易かった。

「アレってただの交通安全週間のパトロール・・・いや、違う！」

「交通安全週間のパトロールがこんな時間にいる訳ないでしょが快斗坊ちゃん！」

寺井はすかさず快斗につっこみを入れた。
そこには5台のパトカーのランプが快斗のモノクルから確認することが出来た。

「本当だ・・・」

快斗は、それを確認すると、偵察に鳩を使うことにし、鳩の足にGPSと盗聴器をつけたものを括り付け、空に放った。

そして、今度は望遠鏡を持って確認することにした。

「あれ、あの小さな探偵君もいるのかあ・・・事件があるところあるとこやってくるやつだからなあ・・・何かありそうだな。」

その言葉を聴いた寺井は、快斗がこれからすることを予測していたのだろうか、快斗にあるものを持たせようと声をかけた。

「快斗坊ちゃま、ハンググライダーをお使いになられるのでしたら、こちらの充電とロケットエンジン付のハンググライダーを使ってください。これならいつもの怪盗キットのときも、ハンググライダーの風向きに左右されるという点を弱点にすることなく使用できます。」

快斗は、一瞬ロケットエンジンを使えるのかどうか不安だったものの、そのような装備を作ってくれた寺井に感謝していた。

「ありがとうジイ！！すっげえ助かるぜ！！」

「では、私は個人的にパンドラを追ってる組織を調べてみますので、快斗坊ちゃまはあの毛利小五郎に接触して、パンドラの組織を調べてください。」

「寺井、無理するなよ！」

寺井はそうだったが、快斗はその毛利小五郎も有益な情報を持っているような人を知っていた。

そう、毛利小五郎より小さな探偵君と快斗が言うコナンに接近して組織のこと聞くことにしてみた。このとき、快斗はコナンの事をしるよしもなかったが、何かがあることは感付いていた。

こうして快斗は東都タワーからハンググライダーで降下して、コナンと同一人物であろう工藤新一の自宅に向かうことにした。そして寺井はパンドラを狙う宝石強盗犯を黒の組織として、これを詳細に捜査し始めた。

工藤邸

「はぁ・・・やっと着いたか。」

快斗は怪盗キッドの服装で工藤邸屋上に着地した。

しかし、快斗はロケットエンジンの扱いに困っていた。

ロケットエンジンの出力は大変よかったものの、調節がうまく出来なかったため、目的地とはるか彼方に飛んでしまったりしてしまった。

その頃コナンは、蘭に付き添って病院に行っていたため、工藤邸にはもちろん、探偵事務所にも阿笠邸にもいるわけがなかった。

「寺井は隣の阿笠という家を見つけたらいいってたが・・・阿笠、阿笠・・・あつ、これか！」

寺井からハンググライダーをもらうときに、快斗は工藤邸の隣の阿笠という家に行くと良いと言っていたのだった。そのため、その通りに快斗の姿で阿笠邸の方向へ歩いていった。

そして、快斗は工藤邸から阿笠邸を発見したものの、周囲には警視庁の警備部から派遣された警察官や、数名の機動隊員が居たため、阿笠の家にピンポンを押してではいることもせず、警察官にばれなように工藤邸の中に進入し、今日は一回のある程度広い部屋で寝袋を敷いて寝ることにした。

第28話 第4章 快斗の行動（後書き）

お久しぶりです、たくみ226です。

これから夏休みになるかな…といっても、強制参加の補習が7月いっぱいまであり、8月には塾が…で何話分更新できるかは分かりませんが、できるだけ更新していこうと思います。

第29話 第4章 宿敵(kid) (前書き)

時代は変わってしまったみたいです。

前にアクセスしたときにはあったはずのサイトは開店休業状態になり、基幹システムは別会社が事業承継し、自分自身も学生ではあるものの、大学2回生に・・・

前の投稿からずいぶん時間はたっているのは、投稿日時を見るとわかってしまいますが・・・

とにかく、本編へ・・・

第29話 第4章 宿敵(kid)

阿笠邸

「哀君、新聞とってくれ。」

この家の主である阿笠は、朝食を作っている哀に向かって言った。

すると、哀がダルーイ感じで博士に言葉を返した。

「博士が動かないと……。健康のためなんだから。あっそうそう、ついでに工藤くんの所もよろしくねっ！」

「わ、分かったわ。」

博士は自分の家と、隣の家である新一宅の郵便受けを取るのがおっくうだったが、自分はゆっくりしているのに、家事をしている灰原に全てを任せるわけにもいかまい。仕方なく、自分の家の郵便物を確認して新一の家の郵便ポストを確認していた。

「昨日は哀君が見てたというのに、こんなにもあるなんて……。」

そこにあったものは、『工藤優作様』と書かれた20通くらいはあろうかというファンレターがあった。博士は愚痴を言ったものの、それらを回収し終えたその時……

「アナタが阿笠博士ですね？」

「誰かね？」

阿笠は白のスーツとマント、シルクハットを身にまとい、モノクルをつけた一人の男がいた。

「アンタは・・・早く警察に・・・あっ!？」

博士がそう言っている瞬間にも、2人は瞬間移動で工藤邸の中に入ってしまった。博士は初めて体験したこの様子に驚いていた。

「ここは・・・新一君の家か!？」

博士が連れてこられたのは、新一宅のとある一室だった。それがどこの部屋なのかは、カーテンが閉められており、周りが暗かったために判断できなかった。

数秒して、ロウソク一本が燈されたような明かりがついた。そして、博士の横から

「警察に連絡されると少々厄介なんでね・・・。それで本題ですが、実は阿笠博士さんにお願いがあって来たんですよ。く...いや、江戸川コナン君のことです。」

博士は少々警戒しながらキッドを見ていた。そして阿笠に向かってキッドは話す。

「まずこれを読んでください。私の友人からの手紙です。」

阿笠は封筒の中に入っている便箋を見た。そして、中に書かれてあったこの手紙を書いた主の名前を見つけた。「ああ・・・寺井、思い出した、あの寺井か？ああ、思い出すのお・・・アレは大学の頃じゃった・・・」

大学院の研究室時代・・・

阿笠「あ、あー・・・また失敗した・・・」

寺井「どうした、阿笠？」

阿笠「ああ、寺井か？」

寺井「またあの実験に失敗したのか。」

阿笠「ああ、やっぱり携帯式音声変換機は難しいのなあ・・・？」

寺井「阿笠、そうやって言ったら、何にも出来上がらないんじゃないか？オレもまだ本当に作りたいものはできていないが・・・」

阿笠「ああ、マジック用の道具じゃったかな？」

寺井「ああ、アレができれば本当にマジジャンの役に立つなあーなんて思ってるんだが・・・」

阿笠「まあ、気長にやってたらそのうちできるのかなあーなんて思ったりするんだが、果たしてできるかどうか・・・」

寺井「まあ、失敗は成功も元だというし・・・失敗作も研究してみたら結構できるかもな。後、すごい研究した人の中には、失敗作が別のものを生み出すこともあるし・・・」

阿笠「そうか、そうだ。寺井、オレ、もう一回がんばってみるわ！

寺井もがんばれよ！！」

寺井「ああ、お互い仲間として、ライバルとしてがんばろう・・・」

それから10年後・・・

阿笠は電子機器の研究していた途中、新たな物質を発見したため、その功績で、自宅に簡単な研究室を作り、独立した。

一方、寺井は、マジックの役に立つ機械を売り込んでいたとき、黒羽盗一のマジックにあこがれて、黒羽盗一に仕えた・・・

――――

阿笠は回想して、懐かしそうに寺井について語る。

「・・・というわけじゃ、だから研究そいつ時代から連絡ができなかったから・・・あいつにあってみたいが・・・」

キッドは阿笠に手紙を差し出した。

――――

「この手紙を読んでください。」

――――

親愛なる阿笠へ。

こうやって連絡を取るのはあの研究室以来だな・・・

実は、この手紙を託した怪盗キッドは、私の知り合いだ。彼の父親は、阿笠の知り合いの少年が追っているであろう組織の関連団体と思われる宝石強盗組織によって殺されたんじゃない。だから、一緒にわしらとあいつらのを壊滅させよう！！いい返事を待ってるからな。

寺井

――――

阿笠はうなずき、神妙な面持ちで言った。

「そうか・・・私は哀くんを待たせてるから、また今度会おう。」

キッドは「分かりました。それではまた近いうちに会いましょう。」
といった。

こうして阿笠博士をマジックで自室に送り、キッドは消えた。

阿笠は彼の力によって、居間にワープした。

「はあ、一時は何かと思ったわい。」

哀は、何の音もなしに居間に戻ってきた博士に驚いたが、聞くことはなかった。

哀は、「博士、あたしは今から研究するから、入らないでね。」といい、地下の研究室へと向かった。

それから30分後、重い”ボン”という音が鳴って、煙が薄まると・
・哀はその煙を炊いた主に向かって口を開いた。

「あなたは・・・怪盗キッド？私に何か用？」

キッドはこいつ、なんかカワイクねえーなど思いながら、哀に話した。

「ええ、あなた宛にある組織から手紙が・・・」

哀は警戒心を強めた。ベルモットあたりが変装して何かをしようとしたのではないかとして緊迫した空気が流れたが・・・

キッドは、クラッカーを鳴らしてそれをぶち壊した。

「ビンゴ！！やっぱりあなたは関係者だったんだな！」

哀はあきれながら「何が目的？私を殺したいんなら殺しなさい！」
キレた哀を適当になだめ、キッドは「そうでなくて・・・あなたに協力してほしいんです。実は、私の父は、あなたの入っていた組織の兄弟組織に”パンドラ”という宝石を奪われるのを阻止したので殺されたんです。」

哀はなんとなく心当たりのあった宝石強盗を行う団体を思い浮かべ

「蘭姉ちゃん。今から博士ん家に行ってくるね！」

コナンは歩きながら考えていた。それも当然だ、なぜ阿笠博士や灰原の家を知ってるのか、そして、阿笠博士と灰原に何を言ったか、とても気になっていた。

コナンは走りながらそのことについて考えていた。

「にしてもキッドのやつ、どうして直接オレに言わないのか？ 灰原に接触して……」

そうこうしてるうちに阿笠邸の正面まで来た。

「ピンポーン……………」

阿笠が遠くから叫んだ「はあゝい。」

コナンは早口で言う

「新一だ。あがっぞ。」

コナンは早速博士を問い詰めた。

哀は、コナンを見るや否やさらっと言った。

「あら、工藤君。はやいこと……」

コナンは息を切らしながら言う。

「灰原、博士、怪盗キッドと何を話したんだ？」

博士が事のあらましを説明した。

コナンは灰原が持っていた手紙を見て

「……灰原、お前がメールしてキッドからきた託された手紙ってこれか？」といい、哀の手にあった手紙をさっと奪った。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

親愛なる江戸川コナン君こと工藤新一君

君に頼みがある。君が追っている”黒の組織”のことで話がある。
今夜0時丁度、
帝丹小学校屋上で待っている。
当然この答えは”YES”だろうな。オレもあんたが調べてる組織
の本当の情報
を持ってるからな・・・。

貴方の味方 怪盗キッド

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「そういうことか・・・おい、灰原、キッドに返事を書く方法を知
らないか？」

コナンは哀に相談する。愛は観葉植物の方向を指差した。そこには、
鳩が1羽止まっていた。

「方法は1つだけあるわ。キッドから鳩を1羽預かってきたわ。た
ぶんこれでキッドに渡るから伝書鳩にするんでしょね・・・」
こうして、コナンは返信を鳩に託した。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

怪盗キッドへ

答えはNOって言いたいところだがYESだ。
じゃあ、今夜0時に帝丹小学校の屋上で待っている。
もちろん、警察抜きだ。

江戸川コナン

—
—
—
— — — — — — — — — — — — — — — — — — — —

「じゃあ、頼むぞ。」

こうしてキッドの鳩は阿笠邸の窓から放された。

帝丹小学校 23..55

コナンは寒い屋上の上に立っていた。

「それにしてもキッドのやつ、小学校の屋上なんて、何でここに
したんだ？俺が小学生だからってキッドのやつ、からかってるのか？」

24..00 (0..00)

「時間か・・・」

コナンがそうつぶやいた瞬間、校内を巡回する警備員が屋根の上に乗ってきた。「おや？君はココの生徒か？こんな時間に学校にいるんじゃないよ！早く帰れ！」と注意された。

コナンはその姿がいつもの警備員より多少若いように見えたことに不信感も持ち、近くに寄り、「お前、怪盗キッドだろ！？」と強い口調で言った。

警備員は、顔の特殊メイクをはがしながら「ああ、そうだよ、探偵君。」といった。

その瞬間、あの白い衣装に身を包んだ怪盗キッドの姿に変わった。

コナンはさらに語気を強める。

「それで、オレに何の用だ！」

キッド「・・・それは、あの少女、いや女性かな？彼女に聞いただけ。」

コナン「ああ、大方は聞いている。ただ、ひとつお前の正体について聞いていいか？20歳前後だろ！？」

キッドは含みを持たせて回答する「何でそう思うんだ？」

コナン「お前、ココに来た事あるか？」

キッド「だったら、どうなんだ。小さな探偵君？」

コナン「だからだよ。俺の知ってる怪盗キッドは、10年前、この学校に来た事があるからな。」

キッド「（親父がか・・・）へえ、そう・・・」

コナン「それで、本題を話してもらおうか！」

キッドは本題に入った。

「ああ、実は、その組織についてなんだが、組織のボスはオレの親父や、お前の母親、組織のベルモットという女より変装上手らしい。だから・・・イテテテ・・・」

キッドが話している最中に、コナンは頬をつねってきた。探偵としての性さがなかもしれないが、無性に彼の本当の顔が気になっていた。

コナンは、変装でないことに気づき、驚いた。

「えっ！？ お前、お前これが素顔なのか！？」

キッドはコナンの問いを無視して話しを続けた。

「・・・それで、俺の仲間の情報では、実は、神戸で最近になってから、全身黒ずくめのやつがよく出没していると聞いた。オレは4日後に出航する船に潜入してみるが、お前はどうか？」

コナンはニヤツと笑った。

「ああ、それならお前の作戦に便乗するぜ。それと、今回も借りを作ってしまったな。探偵としては失格だ。またお前を捕まえられない。ただ、今度俺の前に姿を現すときには・・・容赦なく警察の前に突き出してその正体を白日の下へさらしてやるからな！」

キッドはそのコナンのセリフを言い終わるか終わらないかの時に「じゃあな・・・BON!!」と煙幕弾を使って逃げていった。

第29話 第4章 宿敵(kid) (後書き)

まさか、ここまで伸びてしまったと思いませんでした。

小説について忘れていたわけではありませんが、ぜんぜんアクセスしていませんでした。

すると、何もかも変わってしまったていた。

憧れの作者さんはいなくなり、この世界の中でstrangerになっってしまったている自分……

新たな気持ちで……といっても、昔の小説を続けている状態です。

今後どうするかはまだ考えていません。投稿を再開するかもしれませんが、ここを辞めるかもしれせん。

どちらにしろ、この小説の反響で考えたいなと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4409b/>

コナンと黒の組織の決戦

2010年10月8日12時01分発行